原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第32集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書③

2006

長崎県教育委員会

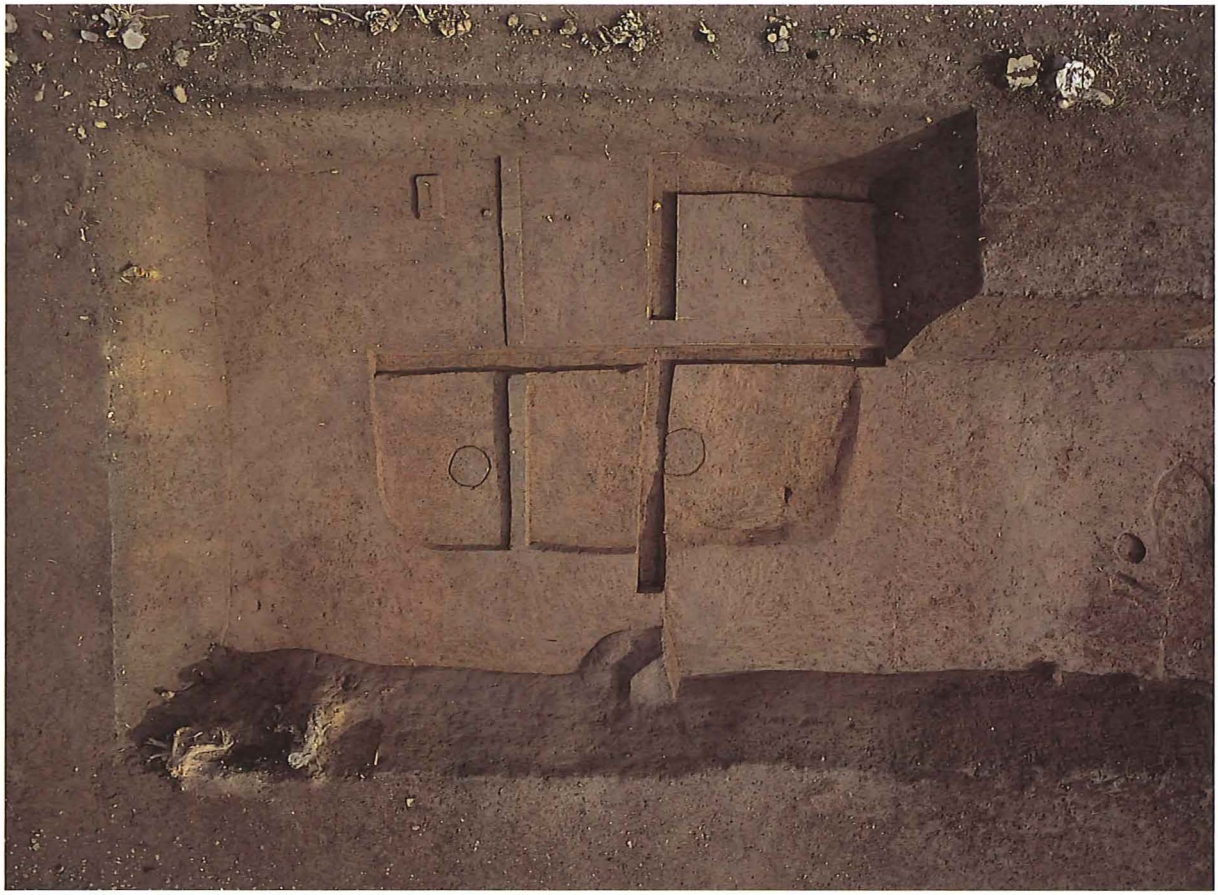
原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第32集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書③

Pho 1　原の辻遺跡全景航空写真（南から）



Pho 2　E調査地 住居跡検出状況航空写真

Pho 3　F調査地 埋甕土坑検出状況

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い実施した，原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記される「一支國」の王都として特定されています。弥生時代におけるクニの実体を解明できる希有の遺跡として，平成12年度に国特別史跡に指定された重要な遺跡です。

今回は遺跡南側の原ノ久保Ａ地区の調査を行いました。この原ノ久保Ａ地区では平成８年度の範囲確認調査において，弥生時代後期後半から終末期にかけての「一支國」における有力集団の墓域が確認されています。

また，この原ノ久保Ａ地区の東に位置する大川地区では，平成10年度の範囲確認調査において，イスラム陶器や初期貿易陶磁などの古代の遺物が多く出土しています。特にイスラム陶器は，これまでに太宰府条坊跡や鴻臚館などの重要な政庁関連施設跡でしか確認されておらず，このことは古墳時代前期で終焉を迎える原の辻遺跡の変遷を考察するうえで大変興味深いことといえます。

本年度の調査では，以上のような過去の調査成果を十分に考慮し，原ノ久保Ａ地区墓域の広がりや，古代における遺構・遺物の確認や大川地区との関連性を念頭においた調査を実施しました。

最後に，調査に際して多くの方々にご協力頂いたことに深謝するとともに，本報告書が研究の一助になれば幸いです。

2006年２月28日

長崎県教育委員会教育長　　立　石　　暁

例　　言

1．本書は，主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成16年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書は，平成17年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。

3．本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市石田町石田西触に所在する。

4．本事業は長崎県壱岐地方局建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．調査組織は下記の通りである。

(1)　平成16年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	課長（兼）	野中滋生	（現県教委学芸文化課）
	係長（兼）	冨永宏美	（壱岐教育事務所）
	係長	村川逸朗	
	主任文化財保護主事	福田一志	※調査担当
	文化財保護主事	林　隆広	※調査担当
	文化財保護主事	溝上貴稔	
	文化財保護主事	中尾篤志	（現県教委学芸文化課）

調査協力　壱岐市教育委員会文化財課

(2)　平成17年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	係長	村川逸朗	
	係長	森崎伸一	
	主任文化財保護主事	福田一志	※報告書担当
	文化財保護主事	寺田正剛	
	文化財保護主事	林　隆広	※報告書担当
	文化財保護主事	溝上貴稔	

6．本書に収録した遺物の実測・製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。

7．本書収録の遺物・図面・写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。

8．平面直角座標は旧日本測地系を使用している。

9．自然科学分析は古環境研究所に依頼した。

10．本書では原の辻遺跡関連報告書を略称（例：Ｈ８範囲確認調査）で引用している（Fig14およびTab７参照）。

11．本書では挿図図版を Fig，表組図版を Tab，写真図版を Pho で表記している。

12．本書の執筆は福田・林が行った。

13．本書の編集は林が行った。

遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年度４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から－0.417mの修正をおこなった新しい標高値を採用するものとする。

本 文 目 次

Ⅰ章　遺跡の立地する環境
1．地理的環境……1
2．歴史的環境
(1)　旧石器・縄文時代……2
(2)　弥生時代……4
(3)　古墳時代……6
(4)　古代・中世……8
(5)　近世・近現代……12

Ⅱ章　調査の経緯
1．原の辻遺跡における調査の経緯……14
2．本事業調査の経緯……15

Ⅲ章　調査の概要……16
1．A調査地
(1)　調査地の概要……18
(2)　基本層序……18
(3)　遺構・遺物
①Pit 群 ……19
②溝状遺構……19
③表土出土遺物……22

2．B調査地
(1)　調査地の概要……24
(2)　基本層序……24

3．C調査地
(1)　調査地の概要……25
(2)　基本層序……25

4．D調査地
(1)　調査地の概要……26
(2)　基本層序……26
(3)　遺構・遺物
①1号不明土坑……27
②包含層出土遺物……29

5．E調査地
(1)　調査地の概要……30
(2)　基本層序……30
(3)　遺構・遺物
①住居跡……30
②Pit 群 ……33
③2号不明土坑……35
④不明遺構……35
⑤包含層出土遺物……35

6．F調査地
(1)　調査地の概要……38
(2)　基本層序……38
(3)　遺構・遺物
①埋甕土坑……39
②Pit 群 ……41

Ⅳ章　本調査の総括……42

附編　自然科学分析……45

挿図(Fig)目次

Fig 1　壱岐の位置図 …… 1
Fig 2　旧石器・縄文時代遺跡分布図 …… 3
Fig 3　旧石器・縄文時代遺物図 …… 3
Fig 4　弥生時代遺跡分布図 …… 5
Fig 5　弥生時代遺物図 …… 5
Fig 6　古墳分布図 …… 7
Fig 7　古墳出土遺物図 …… 7
Fig 8　古代・中世遺跡分布図 …… 9
Fig 9　古代・中世遺物図 …… 9
Fig10　原の辻遺跡周辺
　古代・中世遺跡位置図 ……11
Fig11　近世・近現代遺跡分布図 ……13
Fig12　調査地位置図 ……14
Fig13　調査区配置図 ……15
Fig14　原ノ久保Ａ地区遺構配置図 ……17
Fig15　Ａ調査地平面図 ……18
Fig16　Ａ調査地土層図 ……18
Fig17　Ａ調査地 Pit 群実測図……19
Fig18　Ａ調査地溝状遺構実測図 ……20
Fig19　Ａ調査地溝状遺構出土遺物実測図 …21
Fig20　Ａ調査地表土出土遺物実測図 ……22
Fig21　Ｂ調査地平面図 ……24
Fig22　Ｂ調査地土層図 ……24
Fig23　Ｃ調査地平面図 ……25
Fig24　Ｃ調査地土層図 ……25
Fig25　Ｄ調査地平面図 ……26
Fig26　Ｄ調査地土層図 ……27
Fig27　Ｄ調査地１号不明土坑実測図 ……28
Fig28　Ｄ調査地１号不明土坑
　出土遺物実測図 ……28
Fig29　Ｄ調査地包含層出土遺物実測図 ……29
Fig30　Ｅ調査地平面図 ……31
Fig31　Ｅ調査地土層図 ……32
Fig32　Ｅ調査地住居跡および
　住居跡出土遺物実測図 ……33
Fig33　Ｅ調査地 Pit 群・２号不明土坑
　および Pit 出土遺物実測図……34
Fig34　Ｅ調査地不明遺構実測図 ……35
Fig35　Ｅ調査地包含層出土遺物実測図① …36
Fig36　Ｅ調査地包含層出土遺物実測図② …37
Fig37　Ｆ調査地平面図 ……38
Fig38　Ｆ調査地土層図 ……39
Fig39　Ｆ調査地 Pit 群および
　埋甕土坑実測図 ……40
Fig40　Ｆ調査地埋甕土坑出土遺物実測図 …41
Fig41　Ｅ・Ｆ調査地遺構配置図 ……41
Fig42　Ａ調査地周辺の環濠等の位置図 ……43

表組(Tab)目次

Tab 1　壱岐・対馬面積比率表 …… 1
Tab 2　旧石器・縄文時代遺跡一覧表 …… 3
Tab 3　弥生時代遺跡一覧表 …… 5
Tab 4　古墳一覧表 …… 7
Tab 5　古代・中世遺跡一覧表 …… 9
Tab 6　近世・近現代遺跡一覧表 ……13
Tab 7　原ノ久保Ａ地区
　　関連報告書一覧表 ……16
Tab 8　Ａ調査地土層観察表 ……18
Tab 9　Ａ調査地溝状遺構土層観察表 ……20
Tab10　Ａ調査地溝状遺構
　　出土遺物観察表 ……21
Tab11　Ａ調査地表土出土遺物観察表 ……22
Tab12　Ｂ調査地土層観察表 ……24
Tab13　Ｃ調査地土層観察表 ……25
Tab14　Ｄ調査地土層観察表 ……27
Tab15　Ｄ調査地１号不明土坑
　　出土遺物観察表 ……28
Tab16　Ｄ調査地包含層出土遺物観察表 ……29
Tab17　Ｅ調査地土層観察表 ……32
Tab18　Ｅ調査地住居跡・Pit 群
　　出土遺物観察表 ……34
Tab19　Ｅ調査地包含層出土遺物観察表 ……37
Tab20　Ｆ調査地土層観察表 ……39
Tab21　Ｆ調査地埋甕土坑
　　出土遺物観察表 ……41

写真(Pho)目次

Pho 1　原の辻遺跡全景（カラー）
Pho 2　Ｅ調査地 住居跡検出状況（カラー）
Pho 3　Ｆ調査地 埋甕土坑検出状況（カラー）

Pho 4　Ａ調査地溝状遺構検出状況① ……20
Pho 5　Ａ調査地溝状遺構出土遺物検出状況① ……20
Pho 6　Ａ調査地溝状遺構検出状況② ……23
Pho 7　Ａ調査地溝状遺構出土遺物検出状況② ……23
Pho 8　Ａ調査地 Pit 群完掘状況 ……23
Pho 9　Ｄ調査地１号不明土坑検出状況 ……27
Pho10　Ｅ調査地住居跡検出状況 ……44
Pho11　Ｅ調査地 Pit 群検出状況 ……44
Pho12　Ｆ調査地 Pit および埋甕土坑検出状況 ……44

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里可，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差いに田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

このように『魏志倭人伝』にて記される壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8km²，人口は約３万３千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県呼子へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213mにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。『魏志倭人伝』では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から延びた舌状の台地（標高18m）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉾川（約8.8km）が流れ，東へ約1.5km進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２km上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。

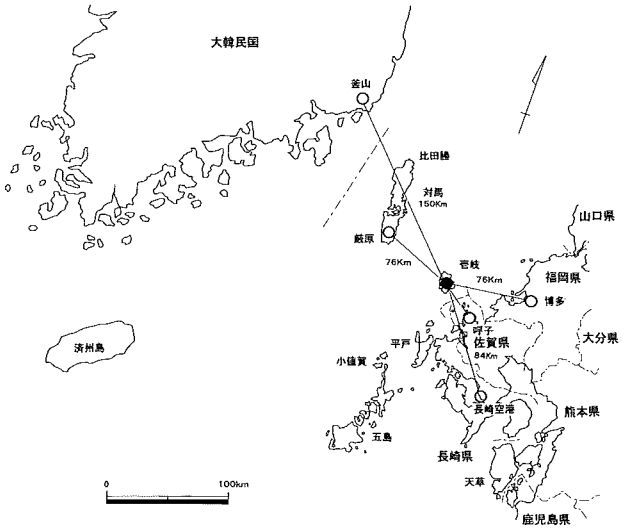
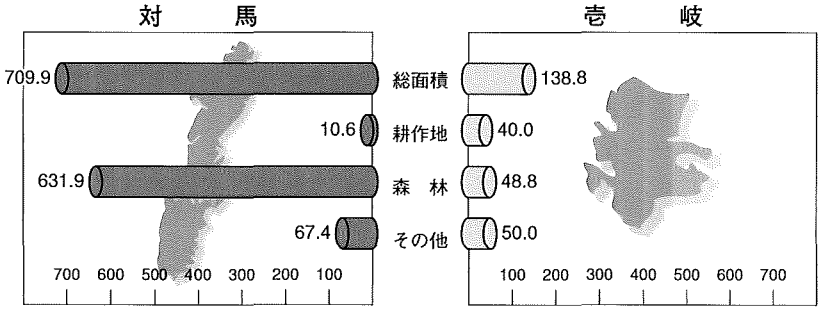


Fig 1　壱岐の位置図



単位はkm²	その他	森林	耕地	総面積
対馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱岐	50	48.8	40	138.8

Tab 1　壱岐・対馬面積比率表

2．歴史的環境

(1) 旧石器・縄文時代

壱岐における旧石器・縄文遺跡は原の辻遺跡やカラカミ遺跡，双六古墳に代表される巨石古墳などの存在から，これまであまり日の目を見ない観があったが，近年の調査により少しずつではあるがその様相が明らかにされつつある。

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり検出された。特に左右非対称の台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180cmの腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されている。特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず韓国南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われている。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，埋土からは人頭大の礫や石皿が検出された。形状は多くが円形の筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から貯蔵と灰汁抜きの兼用と考えられる。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また縄文時代における海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と韓半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

【Fig 3 出典】

1．長崎県教育委員会（1978）「長崎県文化財調査報告書第37集『原の辻遺跡』」
2．長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

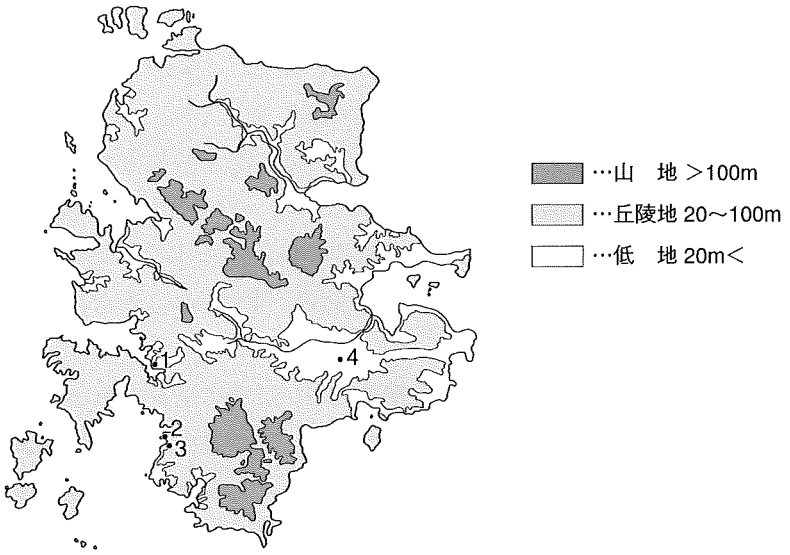
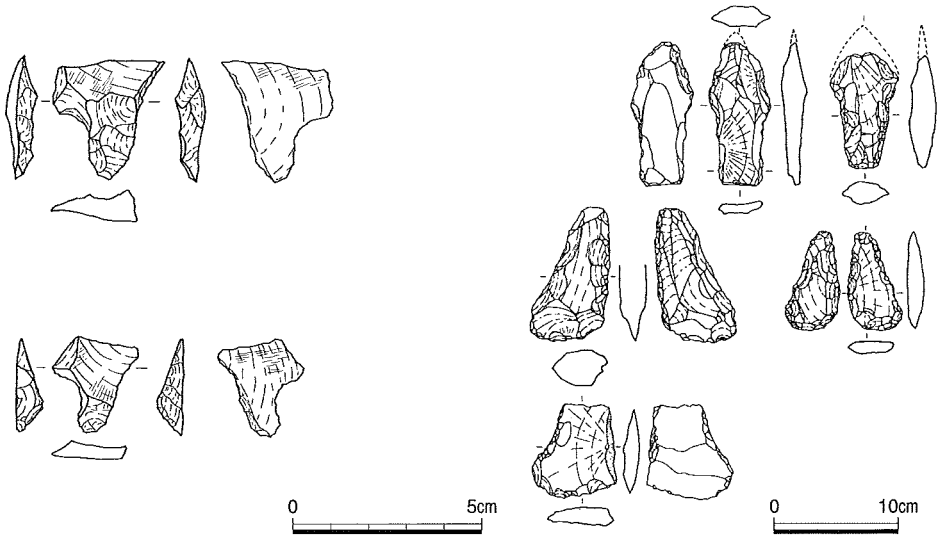


Fig 2　旧石器・縄文時代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 潮間帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
2	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 潮間帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山　順・田中良之（1979）
3	名切遺跡	旧石器・縄文土器・縄文石器 潮間帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
4	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　磯道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）

Tab 2　旧石器・縄文時代遺跡一覧表



1．原の辻遺跡出土台形石器　　2．鎌崎遺跡出土石銛・スクレイパー

Fig 3　旧石器・縄文時代遺物図

(2) 弥生時代

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60カ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha，3重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年（2000）には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約5km西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規矩鏡や貨泉，卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から宗教的な聖地として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70mを超える丘陵部を含む遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）によって銅鏃や卜骨などが確認され，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。韓半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては，天ケ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に中広銅矛が3本出土している。おそらくは韓半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

ともに国境の島でありながら，壱岐と対馬では弥生時代の青銅製武器及び武器形祭器のあり方が異なることが従前から指摘されてきた。対馬ではこれまでに約130点の青銅製武器及び武器形祭器が確認されているのに対し，壱岐は10数点と10分の1にも満たない。12本のうち出土地点が判明しているのは原の辻遺跡の甕棺から出土した戦国式（中国式）銅剣と上記の3本のみである。一方，壱岐，特に原の辻遺跡からは対馬では確認例の少ない銅鏃が100本以上確認されている。また平成14年度（2002）の芦辺町（現壱岐市）における発掘調査では，原の辻遺跡の原地区から鋳型が検出されている。これは原の辻遺跡で大量に検出された銅鏃が青銅素材として使用されたことを想起させ，今後の調査成果が期待される。

【Fig 5 出典】

2．長崎県勝本町教育委員会（1985）「勝本町文化財調査報告書第4集『串山ミルメ浦遺跡』－第1次調査報告書－」

3．　　長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

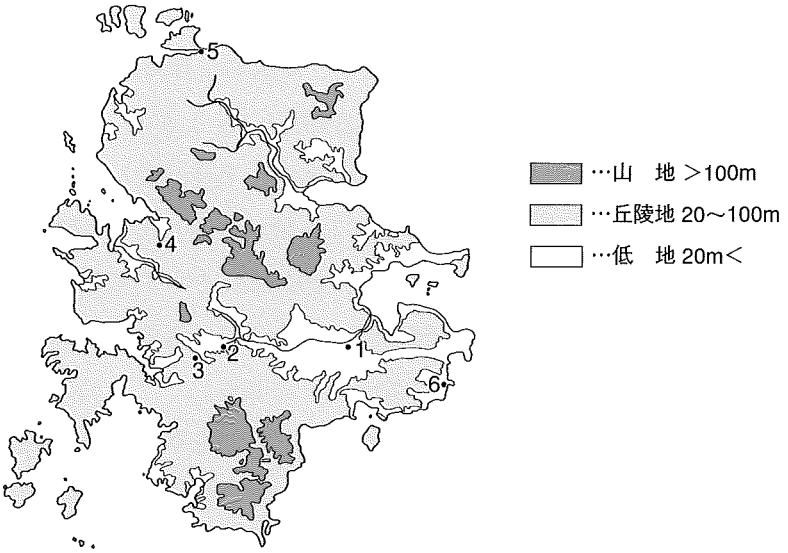
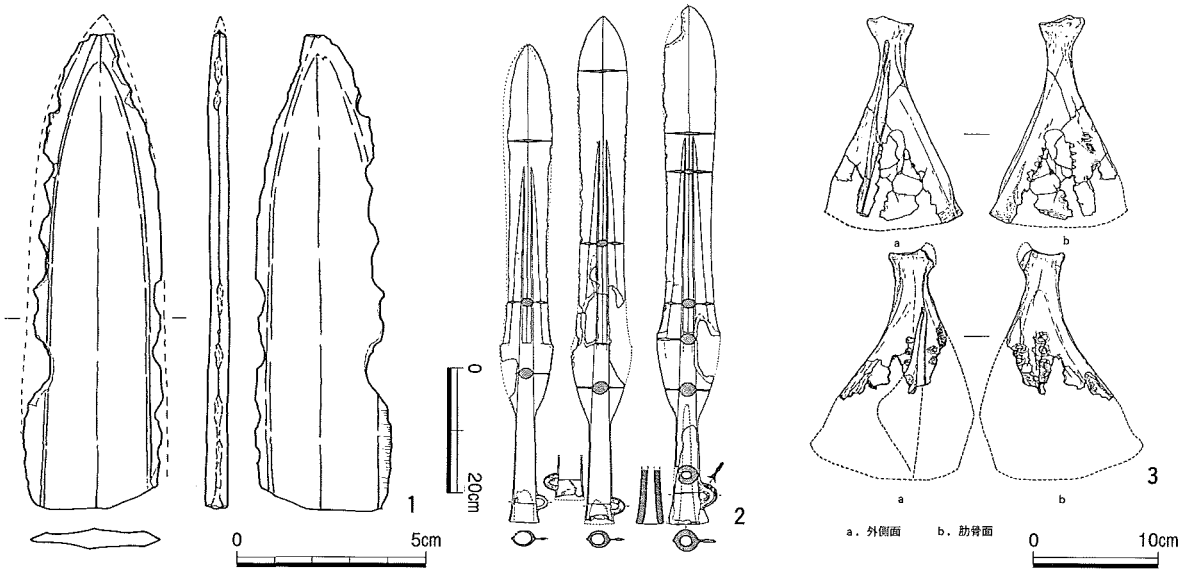


Fig 4　弥生時代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会
2	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
3	戸田遺跡	弥生土器・韓半島系土器 車出遺跡と同一集落の可能性	郷ノ浦町教育委員会（2003）
4	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
5	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
6	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）

Tab 3　弥生時代遺跡一覧表



原の辻遺跡出土戦国式銅剣（1/2）　天ケ原セジョウ神遺跡出土中広銅矛（1/12）　カラカミ遺跡出土卜骨（1/6）

Fig 5　弥生時代遺物図

(3) 古墳時代

現在確認されている壱岐島内の古墳は264基にのぼり，長崎県全体のほぼ半数を占める。江戸時代には338基との記録が寛保２年（1742）編纂の『壱岐国続風土記』に見え，天保８年（1837）には296基であったと『甲子夜話』にあるので，２世紀半で約90基の古墳が消滅したことになる。

これまでの調査成果から，編年的に４世紀までを遡る古墳は確認されていない。現在周知されている古墳では大塚山古墳や俵山古墳の竪穴系横口式石室を埋葬主体とする円墳が最も古く，５世紀後半頃に比定されている。古墳時代初頭から５世紀後半頃までの資料は確認されていないため，この間は石棺墓などの埋葬形態がとられていたのではないかと考えられる。

大塚山古墳に次ぐ古墳としては，玄室と羨道のみの横穴式石室を有するもので妙泉寺１号墳やカジヤバ古墳などがあげられ，造営時期は６世紀前半から中期と推定される。その後，対馬塚古墳や百田頭５号墳が造営され，やや遅れて双六古墳など玄室と前室の２室からなる横穴式石室が出現する。これらの造営時期は６世紀後半と思われ，この頃に壱岐へ前方後円墳が導入されたと思われる。この県下最大の前方後円墳である双六古墳は全長91m，玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mを測る。周溝はなく，自然地形を利用して版築した２段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・唐二彩などの遺物が確認されている。

６世紀末から７世紀に初頭になると島内各地で古墳の造営が行われるが，壱岐島のほぼ中央部，芦辺町国分から勝本町亀石の半径約800mに約90基の古墳が集中する。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17mと長く，巨石をもって石室を構築する。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15mと長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。掛木古墳はやや規模が小さいものの，玄室には凝灰岩製の刳抜式家形石棺が設置されている。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また太古より，壱岐は海を生活の糧としたために海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。６世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，韓半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を，伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。韓半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行われたと思われる。

【Fig 7 出典】

長崎県壱岐市教育委員会（2005）『笹塚古墳』「壱岐市文化財調査報告書第５集－市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査－」

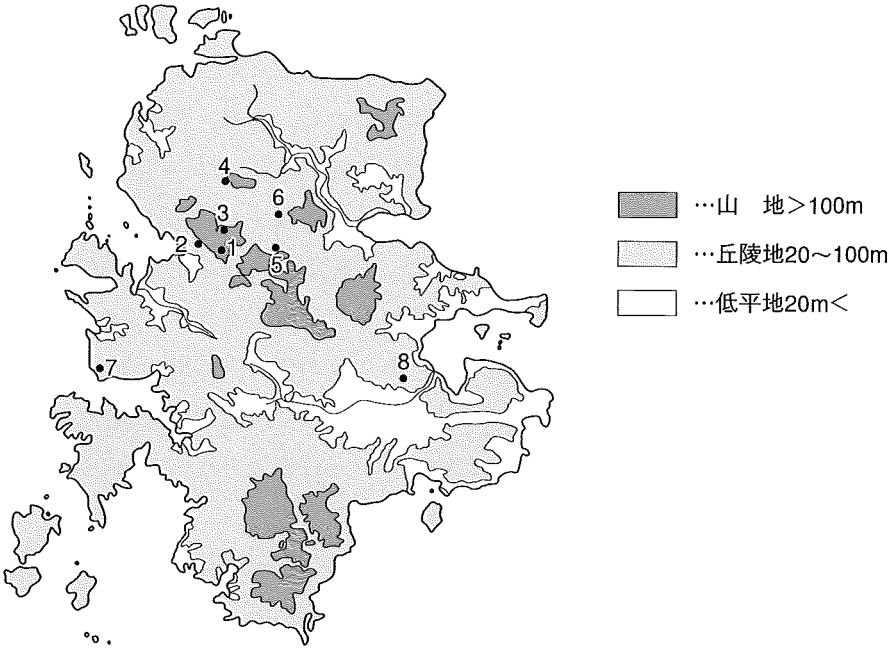
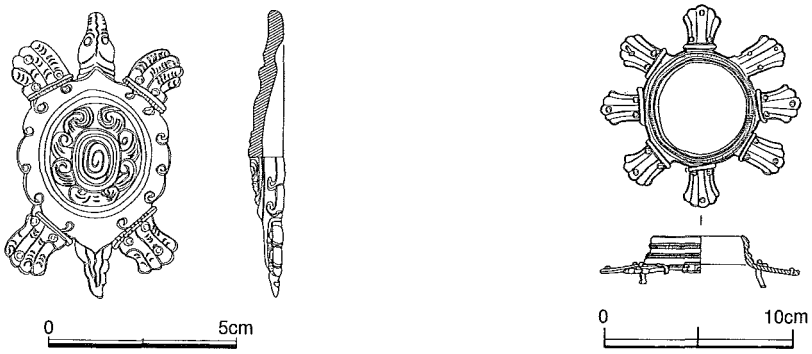


Fig 6　古墳分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	双六古墳	鉄製品・金銅製品・ガラス玉・須恵器・土師器・唐二彩 前方後円墳（全長91m後円部直径43m高さ10.6m前方部幅36m高さ５m）横穴式石室（全長11m玄室･前室）	勝本町教育委員会（2001）
2	対馬塚古墳	— 前方後円墳（全長約65m後円部直径約36m前方部幅25m）横穴式石室（全長9.4m玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
3	笹塚古墳	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38m高さ10m方墳の可能性も）横穴式石室（14.8m玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
4	掛木古墳	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30m高さ７m）横穴式石室（全長13.6m玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
5	鬼の窟古墳	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45m高さ13m）横穴式石室（全長16.5m玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
6	兵瀬古墳	— 円墳（直径34m高さ８m）横穴式石室（全長12m玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
7	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失　石室も半壊しており開口方向など不明　袖石に船の線刻あり	副島康司・木村幾太郎（1981）
8	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14m高さ２m）竪穴系横口石室（全長3.96m）	芦辺町教育委員会（1987）

Tab 4　古墳一覧表



亀形辻金具（1/2笹塚古墳）　雲珠（1/4笹塚古墳）

Fig 7　古墳出土遺物図

(4) 古代・中世

『和名抄』によると，古代の壱岐は行政的に壱岐郡と石田郡の二郡とに分かれ，さらに壱岐郡七郷，石田郡四郷からなっていたとし，国府は石田にあるとしている。現在，国府跡については中野触の国分に比定されており，現在の石田町からは外れることになる。これについては古代の郡境が現在の町境と異なっていたと判断されている。壱岐島内にも国衙・郡衙などの諸施設があったことは間違いないが，調査などによってその跡が確認された例はない。壱岐の中で古代に関する調査の代表的なものは嶋分寺の調査である。調査では当時の基壇跡や建物跡などが検出され，これによってこの周辺が古代における壱岐の中心域であったことが確認されている。この他，勝本町に串山ミルメ浦遺跡がある。７～８世紀の干鮑を中心とする水産加工場の跡が検出された。この遺跡の意義は，律令制の中で，租庸調の貢納体制に組み込まれた壱岐の姿を端的に示したことにある。また，亀卜をおこなった事実も知られるなど，古代の生産体制や，精神的な部分まで理解される。

中世になると，文献的に資料は少ないが，13世紀以降松浦党諸氏によって分治されていたことが知られている。また壱岐島内には中世城館が約30箇所ほど知られており，中世にも活発な活動があったことが知られる。これらのことをふまえ，原の辻遺跡周辺の古代・中世の遺跡について，丘陵部を中心とする東西南北の地区別で概観し，遺跡周辺の古代・中世について纏めてみることとする。

①原の辻西部地区

１：興触遺跡…興触には興神社が存在し，地名が国府に通じるところから，ここを国府跡とする説もある。調査ではピット・土坑・溝等が検出されている。遺物は一部緑釉陶器など古代の遺物も出土しているが，多くは中世のものである。特に12・13世紀の白磁・青磁，15世紀前後の青磁・ベトナム産陶磁・土師器などが出土し，遺跡の主体が中世にあることが理解できる。14・15世紀の陶磁器については，ベトナム陶磁などの出土から，近接する覩城跡との関連が指摘される。８世紀から14・15世紀代主体。

２：覩城跡…14～15世紀を主体とする中世城館跡である。調査は平成８年におこなわれ，溝や建物跡などが確認されている。遺物は中国産青磁やベトナム産陶磁，国産土師器などが出土している。城については，志佐氏の代官真弓氏居城と考えられている。遺跡は，14～15世紀代を中心とする。

②原の辻北部地区

３：安国寺前Ａ遺跡…越州窯系青磁の他，初期貿易陶磁が出土している。また，銅銙帯が出土しており，国司相当の身分のものの所持品と考えられている。遺構等は検出されていない。銅銙帯が出土していることから，付近にそれ相当の施設があった可能性がある。８世紀から16世紀代までの遺物が出土している。

４：安国寺前Ｂ遺跡…平成７年の調査で越州窯系青磁のほか，13～15世紀代の陶磁器が出土している。なかでもベトナム製の青磁碗が出土していることは注目される。報告の中で，安国寺Ａ遺跡の出土遺物をふまえ，古代に安国寺付近の緩傾斜面に有力者の居館が存在した可能性を想定している。

５：原の辻遺跡の川原畑地区…調査では，８世紀代の道路状遺構が検出されている。古代の官道と見られるが，おそらく石田の港から国府へ通じる官道であろう。須恵器・瓦等が出土している（山下1997）。

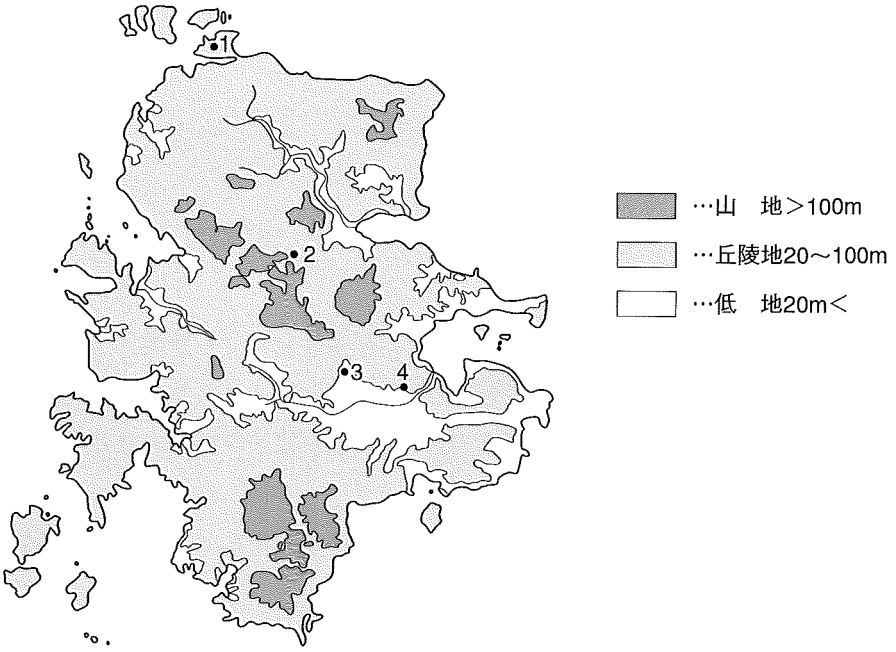


Fig 8　古代・中世遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨角器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
2	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
3	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城　朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
4	壱岐国安国寺跡	— 足利尊氏発願の臨済宗寺　高麗版大般若経を所蔵	—

Tab 5　古代・中世遺跡一覧表

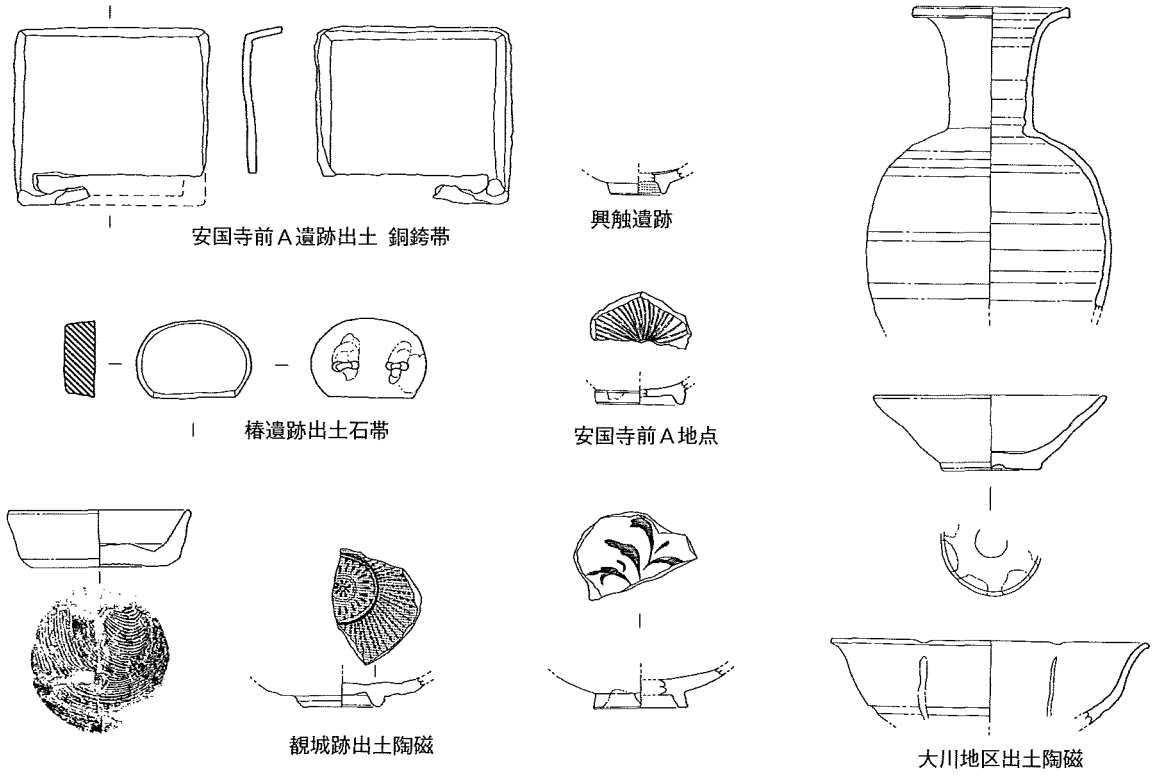


Fig 9　古代・中世遺物図

6：原の辻遺跡高元地区…環濠の一部に掘られた土坑から，木簡が出土している。報告者によれば，近辺に文書を取り扱う役所が存在したことを物語っているとしている（平川1995)。その後の周辺の調査では，古代に関連する遺構・遺物の確認はなされていない。時期的には８世紀代のものか。

③原の辻丘陵西側低地部地区

7：平成14年の県道調査…土師器碗・皿，緑釉皿が一直線上に並んで検出され，祭祀にかかわる遺構として捉えられた場所である。水田との関わりが強いものと考えられるが，緑釉陶器を使用していることから，有力者が関わっていたものと考えられる。時期的には９世紀代のものか(福田・小玉2004)。

④原の辻南部地区

8：大川地区…平成６年に調査がおこなわれ，多くの初期貿易陶磁や，緑釉・褐釉陶器などが出土している。また特筆すべき物としてイスラム陶器が出土するなど，公的施設あるいは，かなりの有力者層の居館跡であったと考えられる。時期的には，８世紀末から10世紀代を中心とする時期。

9：椿遺跡…印通寺港からやや北側に所在する。印通寺港は，古代から港として利用されていたことは確かで，ここから国府へ向けての官道の起点があったものと考えられる。椿遺跡の調査は平成７年に実施され多くの土師器・須恵器のほか，石帯・瓦なども出土し，報告者は７世紀末には草堂が造られ，仏教の受容との関連を指摘している。つまりは，嶋分寺が建立される以前の私的な仏教施設で，これがやがて公的施設へと変化する過程が椿遺跡の中で見られるとしている。時期は６世紀後半から８世紀前半（川口1996)。

10：天水遺跡…14～17世紀を主体とする遺跡で，土師皿と銭貨を埋納した地鎮遺構が検出されている。中世の遺物は，ベトナム産の染付碗や朝鮮王朝陶磁，中国産陶磁も出土している。注目されるのは，銭貨の出土が多いことにあり，この遺跡を介して多くの取引きがあったことを示している。

以上のことから原の辻遺跡周辺の古代・中世についてまとめてみる。古代については，遺跡北側では，官道・銅銙帯・木簡など，８世紀代の公的な遺構・遺物が集中する地域である。木簡の出土は郡衙等の公の機関が想定され，官道と有機的に繋がるということからも，近辺に官衙施設がある可能性が非常に高い。原の辻西部では，興神社付近の調査から，古代の遺物はかなり出土しているものの，直接官衙に結びつくような遺物の出土は見られない。原の辻南部では，大川地区で初期貿易陶磁や緑釉・褐釉陶器の出土から官衙の存在が推定されている。ただし，遺構に乏しく北部のように，直接官衙等に結びつくような状況ではない。初期貿易陶磁の量やイスラム陶器などの遺物から，かなりの有力者層の存在が予想される。また，時期的なものを考慮すると，北部に比べやや後出の遺跡であることから，中心域が北部から大川地区に変化したことも考慮せねばなるまい。椿遺跡の例から考えれば７～９世紀代に有力者層の存在が考えられており，石田の港周辺から大川地区・原の辻の北部への繋がりが見えてくる。官道も官衙も，このライン上にあったことを示す有力な手がかりと言える。また，遺物的にいえることは，統一新羅系の遺物の出土は，仏教関連の遺跡である壱岐嶋分寺跡と，椿遺跡のみである。このことから，椿遺跡は嶋分寺同様，朝鮮半島との関わりがあったことが考えられ，その背景にはやはり有力者層や，公の施設との関連が想定される。

中世については，覩城跡で代表される。14～15世紀代の朝鮮王朝陶磁・ベトナム陶磁・龍泉窯系青

磁などの舶載品が多量に出土し，当時の流通事情を捉える結果となった。この覩城跡を中心とする町屋の一部が検出されたことにより，館を中心に集落が形成されていたことが理解できる。ベトナム陶磁については，希少品と考えられるが，興触遺跡・安国寺Ｂ遺跡・天水遺跡などからも出土していることから，ある程度流通していたことが伺われるが，この地域での流通元は，覩城を中心とするものであると考えられる。また，外海に面した所に位置する天水遺跡は，中世から近世前期にかけて海を生業とする特別な集団が存在したことを考えさせる。

原の辻遺跡の丘陵部と低地部付近からは，古代・中世の遺物は散漫的に出土する程度で，積極的に利用されたと考えられる状況ではない。古代・中世には，丘陵上は畑地として，低地部は水田として開発された結果であると考える。

【参考文献】

川口洋平（1996）『椿遺跡』（石田町文化財調査報告書　第１集）　長崎県石田町教育委員会

川口洋平（1997）『覩城跡』（原の辻遺跡調査事務所報告書　第３集）　長崎県教育委員会

山下英明・川口洋平（1997）『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』（原の辻遺跡調査事務所報告書　第１集）長崎県教育委員会

川口洋平（1998）『興触遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第７集）　長崎県教育委員会

杉原敦史（1999）『興触遺跡・興触川上遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第12集）長崎県教育委員会

福田一志・小玉友裕（2004）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第27集）長崎県教育委員会

河合雄吉（2001）『天水遺跡』（石田町文化財調査報告書　第４集）　長崎県石田町教育委員会

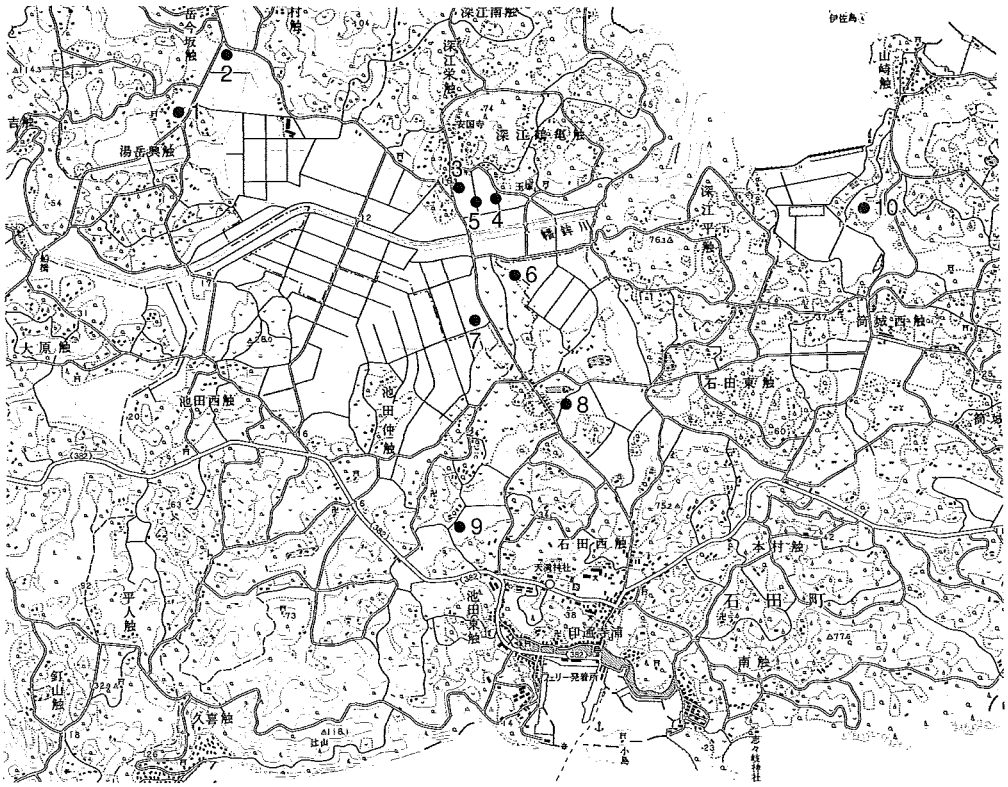


Fig10　原の辻遺跡周辺古代・中世遺跡位置図

(5) 近世・近現代

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵され，文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では第一軍の小西行長のもと三千の軍勢で渡海している。その前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。この勝本城は文禄元年（1592）から慶長２年（1598）までの７年間，豊臣秀長（秀吉の弟）の家臣，本田因幡守正武が城番として約500人の家臣とともに駐在し，兵糧や武器の海上兵站を担った。現在は勝本浦に向かって開かれた枡形虎口と，頂上部を鉢巻状にとりまく石垣が残されている。

松浦氏による壱岐統治体制は江戸期に入り確立する。統治拠点である亀尾城（かめのお）に城代をおき，この下には郡代２名がおかれて壱岐郡と石田郡を監督した。この郡代には代官が４名つき，24村を分担した。各村には庄屋がおかれ，その下には触（ふれ）（集落内の小地域）ごとに初頭（さすがしら）（百姓頭）をつけた。一方，漁業者は壱岐各地に散住していたのを郷ノ浦や芦辺浦など８浦に集住させ，浦ごとに浜使（うらやく）をおき，郷ノ浦には各浦を監督する浦役（うらやく）がおかれた。今日，壱岐の住所に「触」「浦」が付くのは，このような背景が存在する。

秀吉による朝鮮出兵以来，断絶していた日本と朝鮮の国交は，慶長10年（1605）に回復し，その修好は文化８年（1811）までの12回にわたる。壱岐における朝鮮通信使の迎接所は風本浦（現勝本町）浦龍宮寺（のちの神皇寺）におかれた。これは今日の勝本町坂本触正村阿弥陀堂の一帯で，かつては「神皇寺渡頭（ととう）」と呼ばれた通信使が上陸した石段があったが，現在は埋め立てられている。この接待は松浦藩の財政を圧迫したが，通信使節団に含まれた学者や画家，書家や陶工は当時の日本に多くの文化的足跡を残した。また享保４年（1719）通信使の製述官（せいじゅつかん）（文書官のこと）であった申維翰（シンユハン）は当時の勝本浦の様子を『海游録（かいゆうろく）』に記している。蛇足になるが，この『海游録』には本編を踏まえた日本観察また文明批評である付編「日本見聞録」があり，申維翰と雨森芳州（あめのもりほうしゅう）（**註１**）との間で交われた次のような対話が記されている。

「（雨森）…日本と貴国は，海を隔てて隣国であり，信義相孚す。敝邦の人民はみな，朝鮮王国と寡君が敬礼の書を通じていることを知っており，ゆえに公私の文簿には，必ず崇極を致している。しかし，ひそかに貴国人の撰する文集を見るに，その中で言葉が敝邦に及ぶところは必ず，倭賊，蛮酋と称し，醜蔑浪籍，言うに忍びないものがある。…こんにち諸公たちは，この意を知るや否や」。

「（申）その意はおのずから容易に知りうるところだが，顧みるに，貴国こそ，諒解していないようだ。君が見た我が国の文集とは，何人の著であるかは知らぬが，しかしこれすべて壬辰の乱（文禄・慶長の役）の後に刊行された文であろう。平秀吉（豊臣秀吉）は我が国の通天の讐であり，宗社の恥辱，生霊の血肉，実に万世になかった変である。我が国の臣民たる者，誰か，その肉を切り刻みて食わんと思わぬ者がいようか。上は薦紳から下は厮隷にいたるまで，これを奴といい賊といってかえりみないようになり，それが文章に反映したとしても，もとより当然のことであろう。…」

この２人の対話が日本と韓国の現代知識人の間で交わされたものとしても，何ら不思議ではない内

容であり，興味深い。

明治維新を迎え，やがて廃藩置県により壱岐は平戸県となり，さらには長崎県へと編入されて今日の行政区分へ至る。

大正11年（1922）ワシントン海軍軍縮条約が調印され，この条約により主力艦保有量を対米英６割とされた日本は，廃艦処分された艦載砲を陸上用の砲塔・砲台に改造して要塞へ配備した。このような情勢の中，昭和８年（1933）に黒崎砲台は竣工する。巡洋戦艦（後に航空母艦へ改造）「赤城」40㎝カノン砲２門入砲塔１基を装備した黒崎砲台は，東洋一の砲台と称された。同時に名烏島・渡良大島砲台に15㎝カノン砲を中心とした中口径火砲が装備され，太平洋戦争を迎える。壱岐要塞は対馬要塞と並び，対馬海峡の制圧が任務であったが，大戦中はほとんどなすことがなく，島内にあった海軍水測所からの情報を受けて15㎝砲で潜水艦の制圧射撃を行った程度のようである。

【参考文献】

『海游録－朝鮮通信使の日本紀行（東洋文庫252)』(平凡社1974，訳：姜在彦)

（註１）（1668～1755）江戸中期に朝鮮との外交や貿易に尽力した儒学者。対馬藩宗氏に仕える。藩主宗義誠に朝鮮と外交の心得を説いた『交隣提醒』，朝鮮語会話の入門書『交隣須知』などを著す。

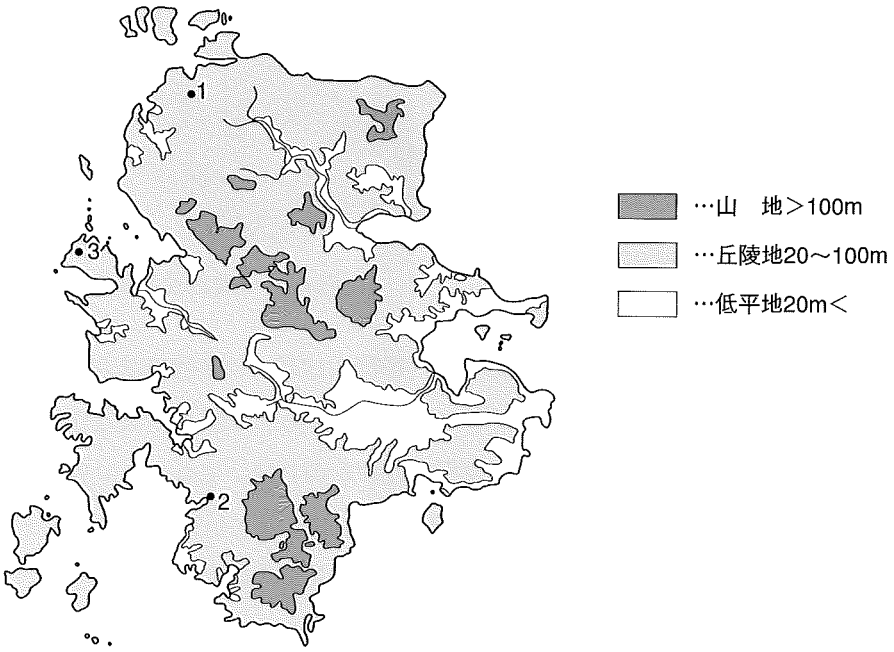


Fig11　近世・近現代遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	勝本城跡	－ 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城	－ 兵站中継基地
2	亀丘城跡	－ 波多宗無が築城した城郭　松浦藩による壱岐統治拠点	－
4	黒崎砲台跡	－ 昭和８年（1933）竣工。巡洋戦艦「赤城」（後に空母）の40㎝カノン砲２門入砲塔跡。	－

Tab 6　近世・近現代遺跡一覧表

Ⅱ章　調査の経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが確認され，遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26～36年（1951～1961）には京都・九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行なわれた。初の本格的な発掘が行なわれたこの調査では各種鉄製品や貨泉，あるいは韓半島系や楽浪系土器が出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面，地元における遺跡への関心は低く，やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畑地から水田への転換が進められた結果，遺跡はかなりの損壊を受けた。昭和49年（1974）には石田大原地区において，水田化改良工事にともなう発掘調査によって墓域が確認された。この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50～52年度（1975～1977）に範囲確認調査が実施され，遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。平成に入ると幡鉾川流域総合整備事業にともない，舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行われた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす，遺跡規模約100haにもおよぶ大規模環濠集落であることが判明した。平成７年（1995）以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され，丘陵上の調査においては多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また低地部の調査も継続して行われ，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることとなった。

Fig12　調査地位置図（１/12,000）

また旧芦辺町教育委員会によって平成11年（1999）から，また旧石田町教育委員会によって平成13年（2001）から遺跡整備にともなう発掘調査が行われいる。旧芦辺町は丘陵部を中心に調査を行い，多数の住居跡を確認するとともに権（秤の錘）や青銅製ヤリガンナ，中広銅矛や鋳型などの重要な遺物を確認している。また旧石田町は大原・大川地区の墓域を中心に調査を行い，甕棺墓22基，多紐細

文鏡や細形銅剣などを確認している。この遺跡整備にともなう発掘調査は壱岐４町（他に郷ノ浦町・勝本町）の合併（平成16年３月）により誕生した壱岐市教育委員会に引き継がれている。

２．本事業調査の経緯

主要地方道勝本石田線は遺跡の丘陵部西側を南北に走るが，幅員が狭く朽化も進んでいるため，改良工事に向けての協議が平成５年度（1993）から行なわれた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが，丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり，また将来的に遺跡整備を行う際の支障となる恐れがあることから，丘陵西側低地部に新たに取り付けることとなった。

その間，遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され，平成９年（1997）には国史跡となり，その３年後の平成12年（2000）には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

Fig13　調査区配置図（１/2,000）

県道改良工事に伴う調査は平成14年度（2002）に着手し，2,400㎡の調査が行われた。当初3,200㎡の予定であったが，水利権が解決していないため調査できない区域が約600㎡存在している。この区域については工事着工直前に調査を行うことで壱岐地方局建設部建設課道路班と合意している。このＨ14県道調査（**福田・小玉2004**）では遺跡西側低地部が調査され，環濠１条・河道２条・溝１条などが確認されている。続くＨ15県道調査（**林2005**）においても同じく遺跡西側低地部3,100㎡の調査が実施され，河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構(畦畔）１基，集石遺構１基，小児甕棺墓１基などが確認されている。

Ⅲ章　調査の概要

本年度調査（H16県道調査）では，原の辻遺跡南側に位置する原ノ久保A地区に6調査地（A調査地～F調査地）を設定した。多くが道路拡幅に伴い退去した住居跡地である。調査地周辺が住宅地であること，また調査地が県道拡幅予定地であるため県道に隣接していることから，廃土仮置場が確保できず，県道拡幅予定地全面の調査は困難を極めた。調査地面積は1,000㎡，調査期間は平成16年6月16日から平成17年2月8日（A調査地：平成16年6月16日～7月16日，B調査地：平成16年6月22日～6月30日，C調査地：平成16年7月14日～7月16日，D調査地：平成16年10月1日～11月12日，E調査地：平成16年7月5日～11月17日，F調査地：平成17年1月17日～2月8日）を要した。

原ノ久保A地区はこれまでの調査成果から，墓域としての評価がなされている。特にH8範囲確認調査（**宮崎1999**）D区では石棺墓12基，石蓋土壙墓5基，土壙墓1基，甕棺墓2基の計20基が確認されている。これはS52範囲確認調査（**安楽・藤田1978**）で把握されていた墓域像を具体的に示すものとなった。墓域形成の時期判断にまだ検討の余地はあるものの，この原ノ久保A地区が原の辻遺跡における弥生時代後期後半から終末にかけての有力集団墓域に比定されることに問題はないと思われる。

また，この原ノ久保A地区の東に位置する大川地区では，H10範囲確認調査（**安楽2000**）においてイスラム陶器や初期貿易陶磁などの古代の遺物が多く出土している。特にイスラム陶器はこれまでに太宰府条坊跡や筑後国府跡，鴻臚館や博多築港の重要政庁関連施設跡で出土しているに過ぎず，このことは，古墳時代前期で終焉を迎える原の辻遺跡の変遷を考察するうえで興味深い。古代，大川地区になんらかの重要施設が存在したと仮定すれば，その性格と規模はどのようなものであったのか。

このような背景から，本年度調査では①「原ノ久保A地区における墓域範囲の確認」，②「古代の遺構および遺物の有無，大川地区との相関性の確認」の2つを念頭に置き，調査を実施した。

番号	本文略称	報告書名 サブタイトル	タイトル	発行	発行年
—	H6圃場整備	原の辻遺跡調査事務所報告書　第1集 畑鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡	長崎県教育委員会	1999
1	H8範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第11集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	1999
—	H9範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第11集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	1999
2	H10範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2000
—	H11範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2000
3	H12範囲確認	原の辻遺跡調査事務所報告書　第22集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	2001
—	S50範囲確認	長崎県文化財調査報告書　第26集 長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡	原の辻遺跡	長崎県教育委員会	1976
—	S52範囲確認	長崎県文化財調査報告書　第37集 長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡	原の辻遺跡（Ⅲ）	長崎県教育委員会	1978

※番号はFig14と対応　　—は本文に出典

Tab7　原ノ久保A地区関連報告書一覧表

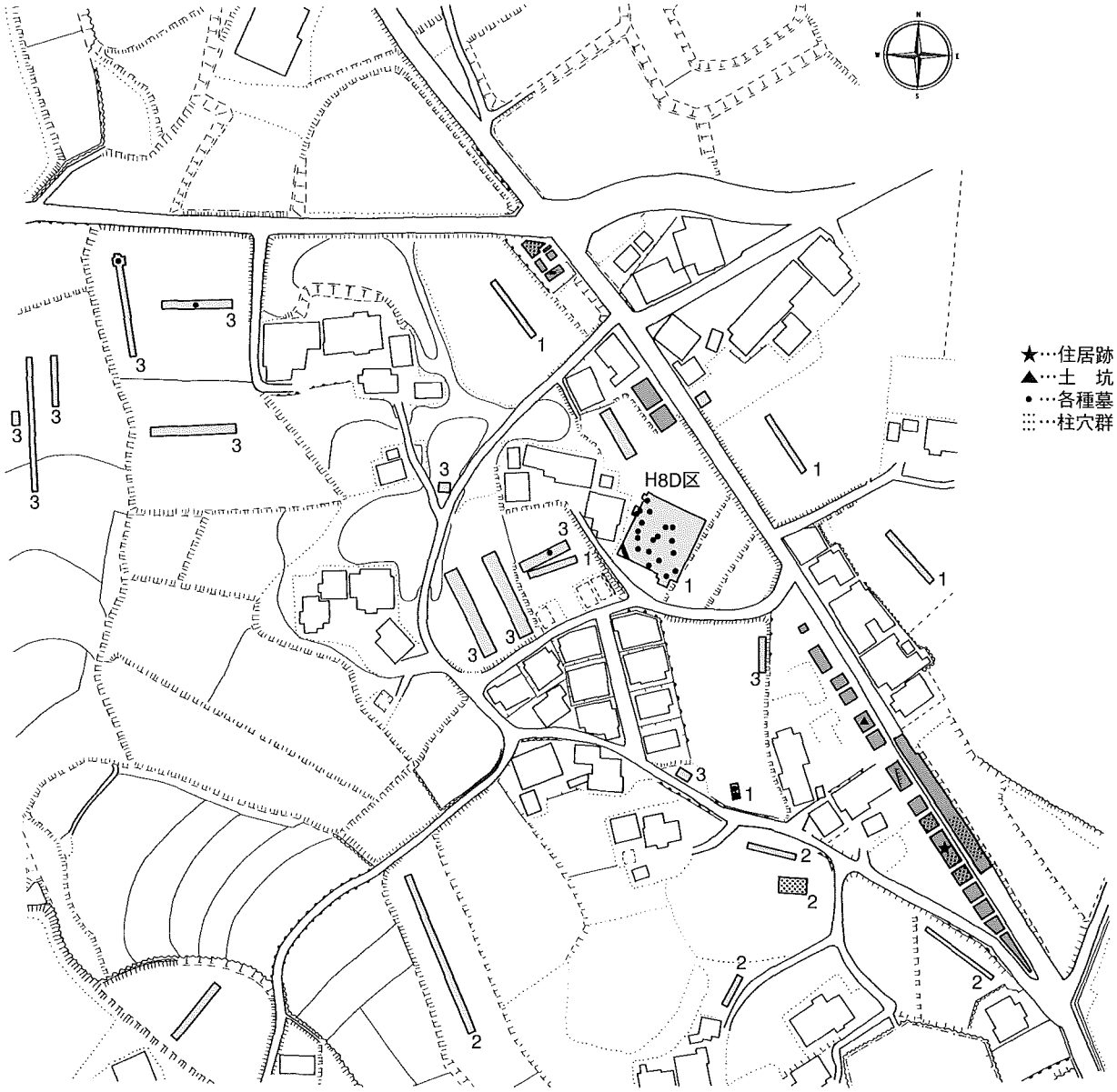


Fig14　原ノ久保Ａ地区遺構配置図（１/2,000）

1．A 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市石田町石田西触字原ノ久保324-4・324-6・324-8

②**調査地面積**：304.24㎡

③**調査地現況**

A調査地は県道勝本石田線と町道江里線の交差点角の住宅跡地に位置する。この北西には約2.3mほど高い水田があることから，調査地はかなりの削平を受けていることが予想された。この水田では長崎県教育委員会によるＨ８範囲確認調査（**宮崎1999**）が行われている。弥生時代中期の土器片が３点出土しているが，遺構は検出されていない。そのため，今回の調査で遺構の検出はないと予想していた。また建造物の基礎部（コンクリート基盤）が残されていたため全面を掘り下げることができず，歪な調査区設定となった。

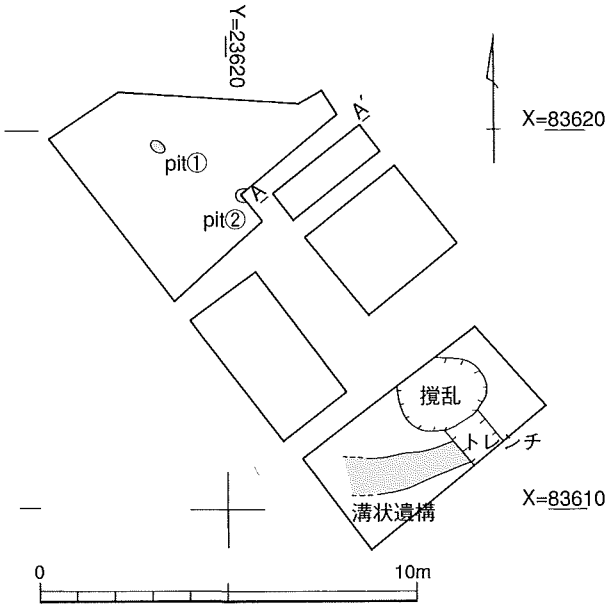


Fig15　A調査地平面図（1/200）

(2) 基本層序（Fig15A-A′→Fig16，Tab８）

２層はＤ・Ｅ・Ｆ調査区に見られる遺物包含層に相当する。この２層は西から東へ傾斜する様相を示すこと，また土層確認トレンチの西側では消滅していることから，この調査地は西側丘陵裾部を削平して造成したと判断される。

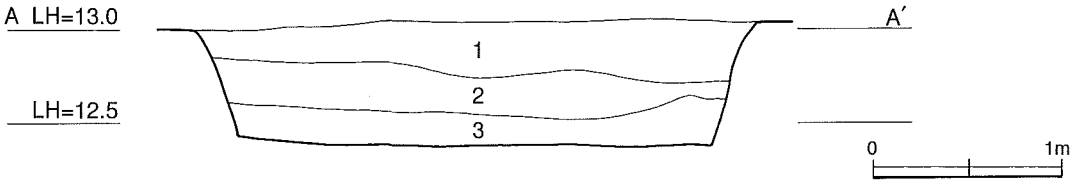


Fig16　A調査地土層図（1/40）

土層番号	土　色	注　記	備　考
１層		造成等による客土層。	
２層	暗茶褐色粘質土層	遺物包含層。一部に弥生式土器も見受けられるが，摩滅が激しい。	Ｄ調査地３層，Ｅ調査地７層，Ｆ調査地３層に相当
３層	明黄褐色粘質土層	地山層。	Ｄ調査地４層，Ｅ調査地８層，Ｆ調査地４層に相当

Tab８　A調査地土層観察表

(3) 遺構・遺物

①Pit 群（Fig17，Pho 8）

調査区北側で２基検出した。Pit①は最長径45cm深さ25cm，Pit②は最長径40cm深さ10cmを測り，ともに楕円形を呈する。遺物は含まれていないため，時期判断はできなかった。

②溝状遺構

・遺構（Fig18，Tab 9，Pho 4 ～ 7）

調査地中央部で検出した。長さ約５m，最大幅約1.5m深さ約0.3mを測る。東西における遺構の延長部分はすでに撹乱を受けているため不明である。検出当初，部分的な落ち込みと推測していたが，弥生式土器７点が遺構床面から投棄された状況で検出されたため溝状遺構とした。含まれる遺物からは弥生時代後期中葉から後葉の時期判断が可能と思われる。

原の辻遺跡ではこれまでに多くの環濠および溝状遺構が確認されているが，その断面形の多くは「V字」形もしくは「U字」形である。この溝状遺構はすでに上部を大きく削平されているため不明な点も多いが，その断面形は北側立ち上がりが緩やかで，一方の南側立ち上がりが急な「レ字」形を示し，特徴がある。

この溝状遺構はほぼ東西方向に軸をとる。そのため現況では西側で丘陵に突き当たることになり，疑問が生じる。遺構西側がやや北西に軸をとるような様相を示すため，あるいは丘陵東側縁辺を沿うように北上するかもしれないが，詳細は不明である。次年度以降にA調査地西側丘陵部の調査を行う予定であり，その際に再度検討する必要があると思われる。

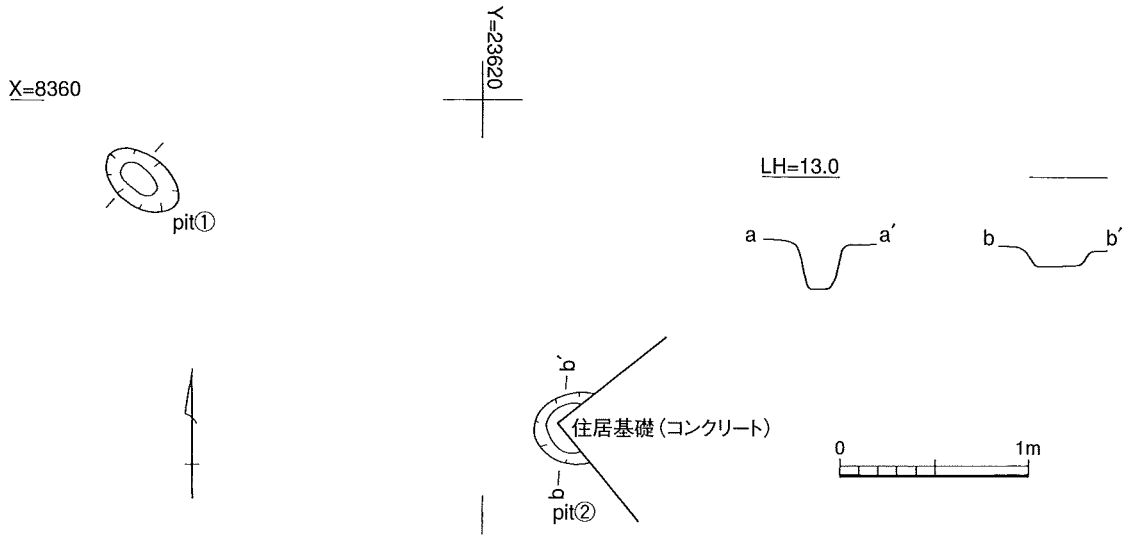


Fig17　A調査地 Pit 群実測図（１/40）

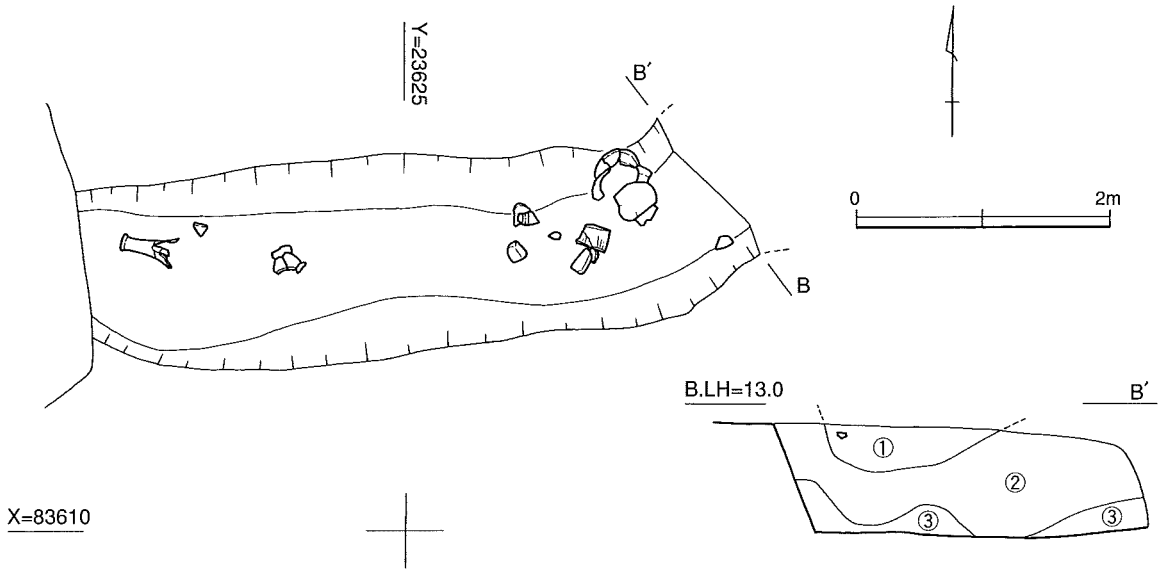


Fig18　A調査地溝状遺構実測図（1/60）

土層番号	土質色	注　記	備　考
SD-1①層	漆黒色弱粘質土層	やや硬質でしまりがある。カーボンを少量含む。溝内部の充填土である。北側は急な立ち上がりを見せ，南側ではゆるやかに立ち上がる。上部はすでに削平されていると思われる。	
SD-1②層	黄灰色粘質土層	溝状遺構が堀込まれた層。しまりのある粘土で③層の玄武岩風化層と思われる。	
SD-1③層	明黄橙色玄武岩礫層	硬質の岩盤層。	

Tab 9　A調査地溝状遺構土層観察表

Pho 4　A調査地溝状遺構検出状況①（西から）

Pho 5　A調査地溝状遺構出土遺物検出状況①（東から）

・遺物（Fig19，Tab10）

1は口縁が「く」字形に外反する甕の頸部である。表裏面とも剥離が多く調整方法は不明である。

2，3は口縁が外反する広口壺の口縁部から肩部で，球形胴のものと思われる。1同様に摩滅および剥離が著しく，調整方法は不明な点が多い。

4は高坏の脚部である。脚部の広がりが少ない。脚部の中央付近に指オサエによる凹みが認められる。

5は球胴形壺の底部と思われる。底部に凸レンズ形状は認められない。

時期判断には非常に限られた資料数ではあるが，広口壺の口縁部形状や頸部径，底部の形状から弥生時代後期中葉から後葉（下大隈新～古段階）の範疇と判断される。

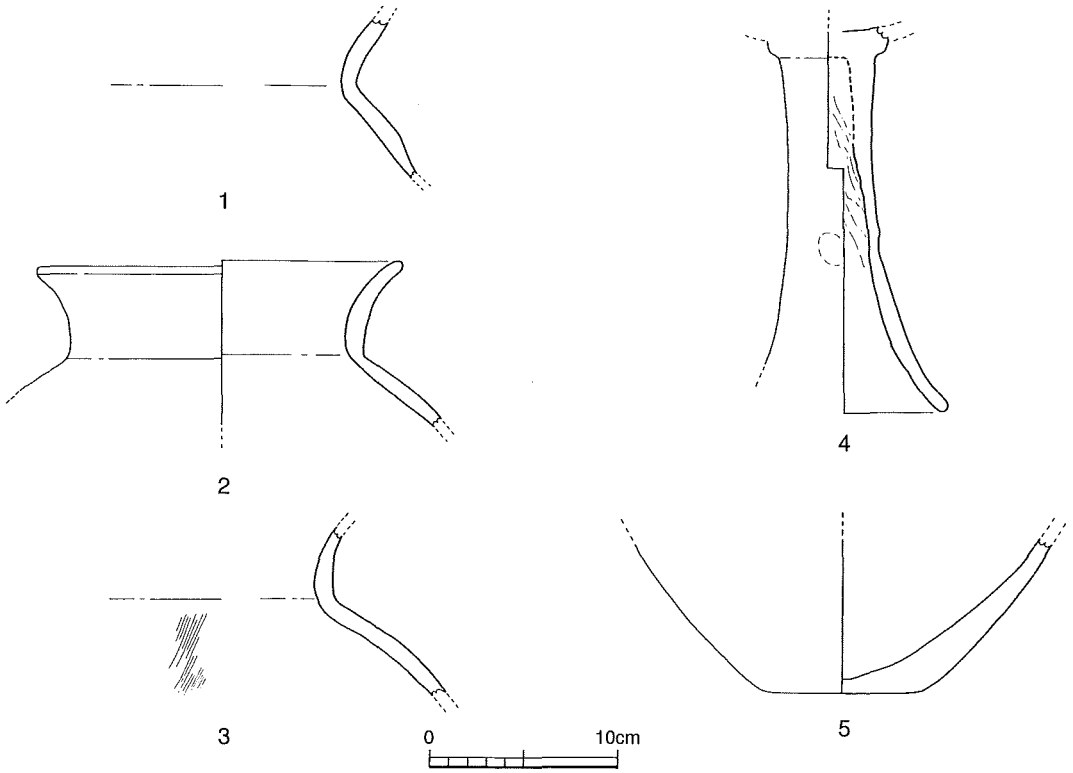


Fig19　A調査地溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

報告番号	調査区　遺構 調整手法	層位	色調番号（表）	胎土	器種	残存状況	備考
1	A　溝状遺構 表：剥離が激しく識別不能	①	Hue5YR4/6 裏：表同様	長石・石英・金雲母	甕	頸～肩部	弥生式土器
2	A　溝状遺構 表：頸部に横ナデ	①	Hue2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	壺	口縁～肩部	弥生式土器
3	A　溝状遺構 表：頸部に横ナデ　肩部に縦ハケ目	①	Hue5YR6/8	長石・石英・金雲母	壺	頸～肩部	弥生式土器
4	A　溝状遺構 表：脚部全体にナデ　指オサエによる凹み	①	Hue5YR6/6	長石・石英・金雲母 裏：指オサエ	高坏	脚部	弥生式土器
5	A　溝状遺構 表：剥離が激しく識別不能	①	Hue5YR6/8 裏：表同様	長石・石英・金雲母	壺	底部	弥生式土器

Tab10　A調査地溝状遺構出土遺物観察表

③表土出土遺物（Fig20，Tab11）

1～2は弥生式土器の甕である。1は口縁部が「逆L」字を呈する。表裏とも摩滅が激しい。時期は弥生時代中期中葉から後葉と思われる。2は口縁部が「く」の字を呈する。時期は弥生時代後期初頭から前葉と思われる。

3は須恵器の蓋である。表に轆轤整形痕がわずかに認められる。

4は淡緑灰色釉の国産磁器である。畳付に砂が付着し，高台外面に2本の鉄釉圏線が認められる。見込内に蛇の目が施され，中央部分に焼成時の上段高台痕が残る。時期は18世紀後半頃と思われる。

5は黄褐色釉の近世の肥前陶器碗である。胴部表に7本の沈線が認められる。見込内には3点の胎土目が残る。高台内を深く削る点に特徴がある。嬉野の内野山窯産（17世紀後半から18世紀前半頃）である可能性も考えられる[註1)]。

註1）川口洋平氏（長崎県教育委員会）より御教授頂いた。

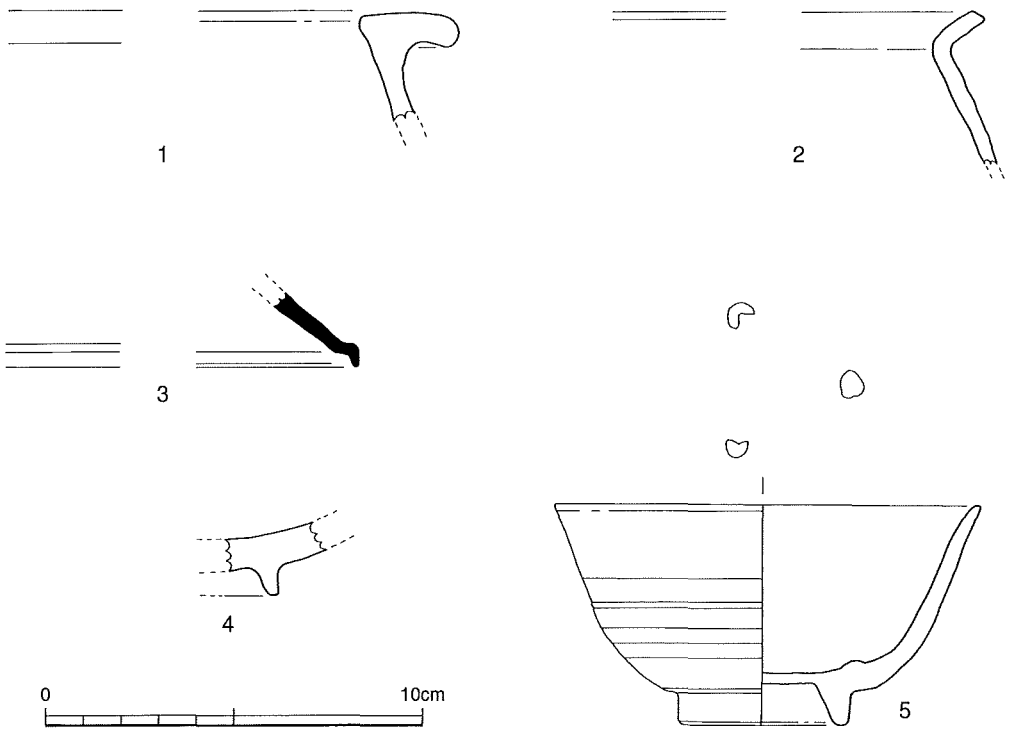
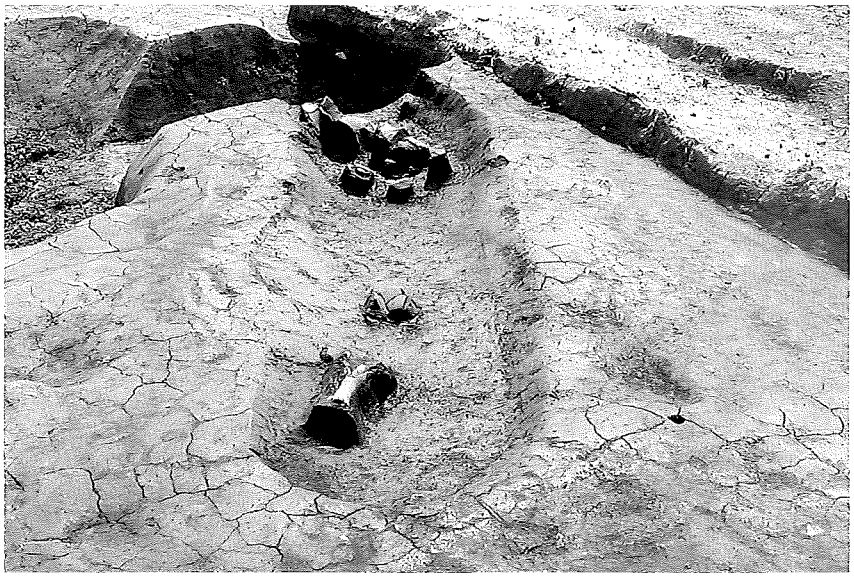


Fig20　A調査地表土出土遺物実測図（1/2）

報告番号	調査区　出土層位　色調番号（表） 調整手法	胎土	器種	残存状況	備考
1	A　表土　Hue5YR6/6 表裏とも調整方法不明	長石・石英	甕	口縁部	弥生式土器
2	A　表土　Hue5YR6/6 表裏とも調整方法不明	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	弥生式土器
3	A　表土　Hue2.5Y5/1 表：轆轤痕	長石・石英	蓋	口縁部	須恵器
4	A　表土　Hue10G7/1 見込：蛇の目　外：鉄釉圏線	磁石土	碗	底部	磁器
5	A　表土　Hue10YR5/6 見込：3点粘土目　外：沈線	粘土	碗	口縁～底部	陶器

Tab11　A調査地表土出土遺物観察表

Pho 6
Ａ調査地溝状遺構検出状況
②（南から）



Pho 7
Ａ調査地溝状遺構出土遺物
検出状況②（西から）

Pho 8
Ａ調査地 Pit 群
完掘状況（東から）

2．B 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市石田町石田西触字原ノ久保330-3・330-4・330-7

②**調査地面積**：189.17㎡

③**調査地現況**

B調査地は県道に隣接する住宅跡地に位置する。調査地南には標高約14.5mの耕地があり，調査地との標高差は1mほどある。この南の耕地では長崎県教育委員会によりH8範囲確認調査（**宮崎1999**）が行われ，D区より石棺墓12基，石蓋土壙墓5基，土壙墓1基，甕棺墓2基の計20基が検出されるとともに，後漢鏡や仿製鏡，勾玉などの重要遺物が出土している。耕地との標高差からすでに削平を受けていることが予想され，地表観察でもすでに岩盤層が露出する状況であった。約20cm掘り下げたが，遺構は確認されなかった。

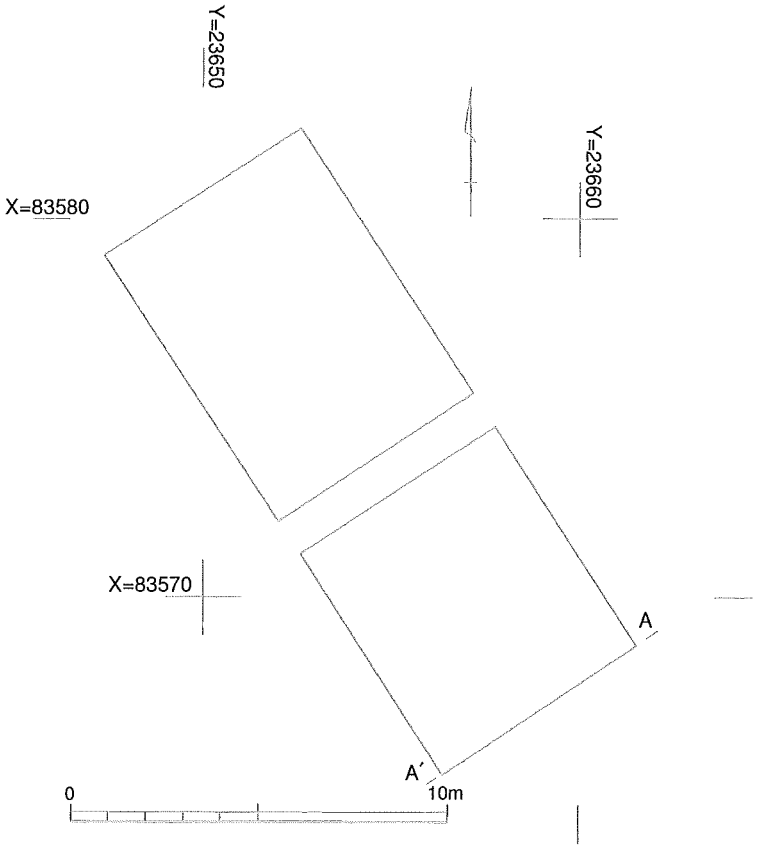


Fig21　B調査地平面図（1/200）

(2) 基本層序（Fig21A-A′→Fig22，Tab12）

住宅基礎部や近代の暗渠など，新しい遺構の掘り込み面は1層（硬質の岩盤層）である。本来，南の耕地同様の地形を大きく削平，整地したと判断される。

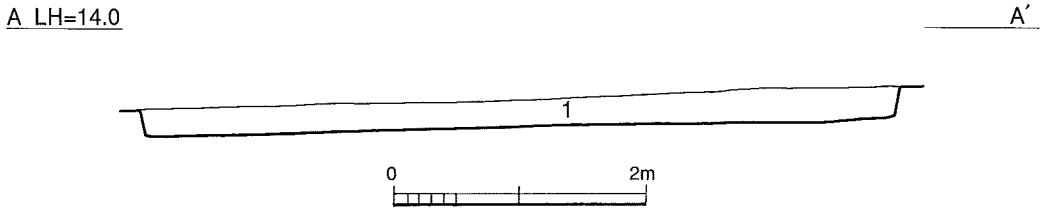


Fig22　B調査地土層図（1/60）

土層番号	土　色	注　記	備　考
1層	明黄橙色玄武岩礫層	硬質の岩盤層。	

Tab12　B調査地土層観察表

3．C 調 査 地

(1) 調査地の概要

①所在地：壱岐市石田町石田西触字大川631-1・631-11・631-12

②調査地面積：185.66㎡

③調査地現況

調査地は県道に隣接するが，標高約13mほどで県道よりも約１m高所に位置する。調査地北西の耕地（標高約14.5m）では長崎県教育委員会によりＨ８範囲確認調査（**宮崎1999**）が行われ，Ｄ区では石棺墓12基，石蓋土壙墓５基，土壙墓１基，甕棺墓２基の計20基が検出されるとともに，後漢鏡や仿製鏡，勾玉などの重要遺物も出土している。

また，この調査地西では同じくＨ12範囲確認調査（**安楽2001**）が行われているが，この際は遺構は確認されなかった。表面観察で岩盤層が露出する状況であり，約20cm掘り下げたが遺構は確認されなかった。

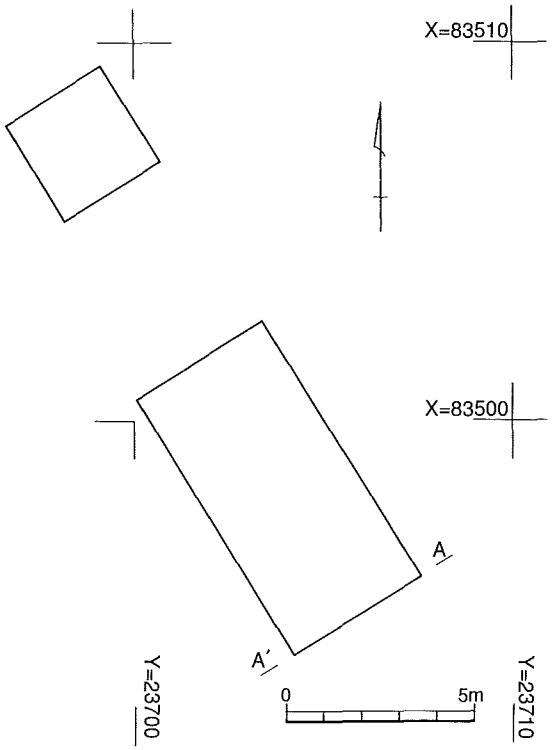


Fig23　C調査地平面図（１/200）

(2) 基本層序（Fig23A-A′→Fig24，Tab13）

近代の排水路など，新しい遺構の掘り込み面は１層（硬質の岩盤層）である。遺構面および包含層は造成の際に削平されたと思われる。

Fig24　C調査地土層図（１/60）

土層番号	土　色	注　記	備　考
１層	明黄橙色玄武岩礫層	硬質の岩盤層。	

Tab13　C調査地土層観察表

4．D 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市石田町石田西触字大川631-23・631-24・631-4

②**調査地面積**：177.44㎡

③**調査地現況**

調査地は県道に隣接する住居跡地（北側で③・④区）ならびに倉庫跡地（南側で①・②区）に位置し，調査地北側から南側に傾斜するような地形を見せる。

(2) 基本層序（Fig25A-A′・B-B′→Fig26，Tab14）

③・④区は深いところで約60cm掘り下げたが，上部は幾層かの客土，その下は岩盤層が確認されたため割愛する。①・②区にて安定した遺物包含層が確認された。これはA調査地およびE・F調査地における包含層に相当する。また，土層堆積状況から，南東へ傾斜する傾向が見受けられる。かつてはC調査地およびD調査地③・④区まで丘陵状であり，D調査地①・②区付近から南東へ緩やかに傾斜する地形を呈していたと思われる。

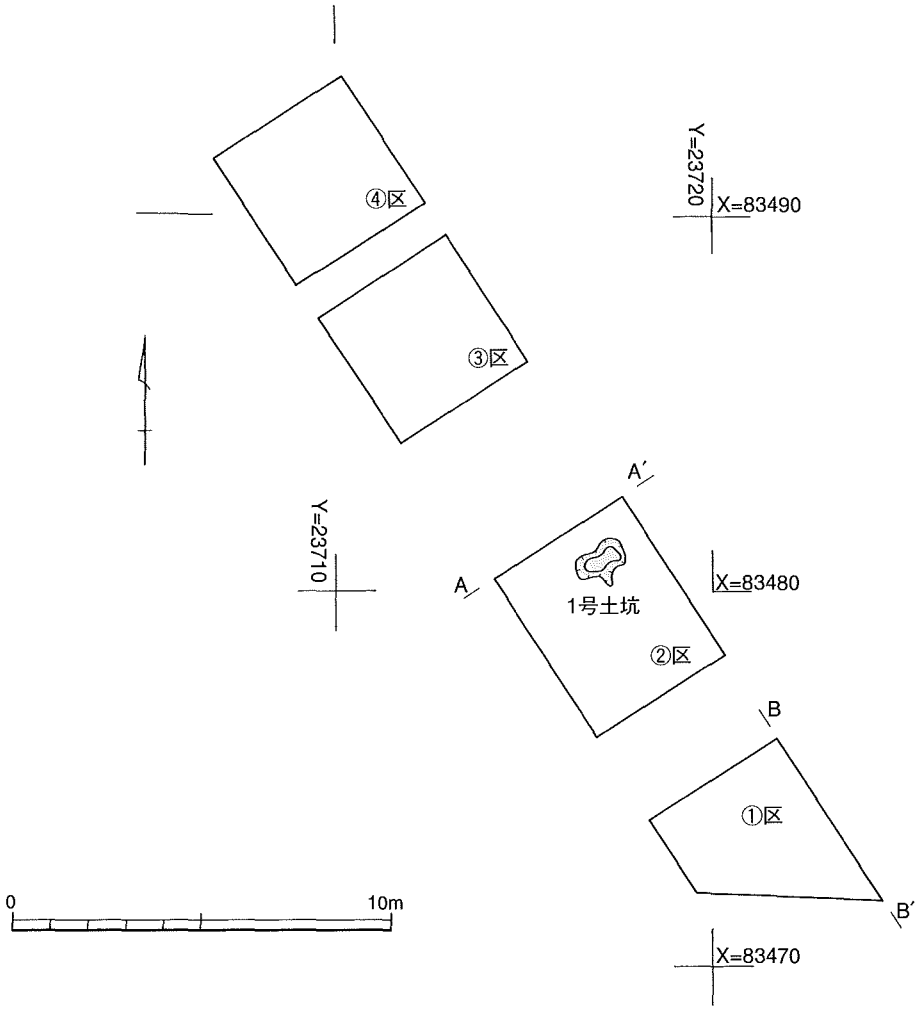


Fig25　D調査地平面図（1/200）

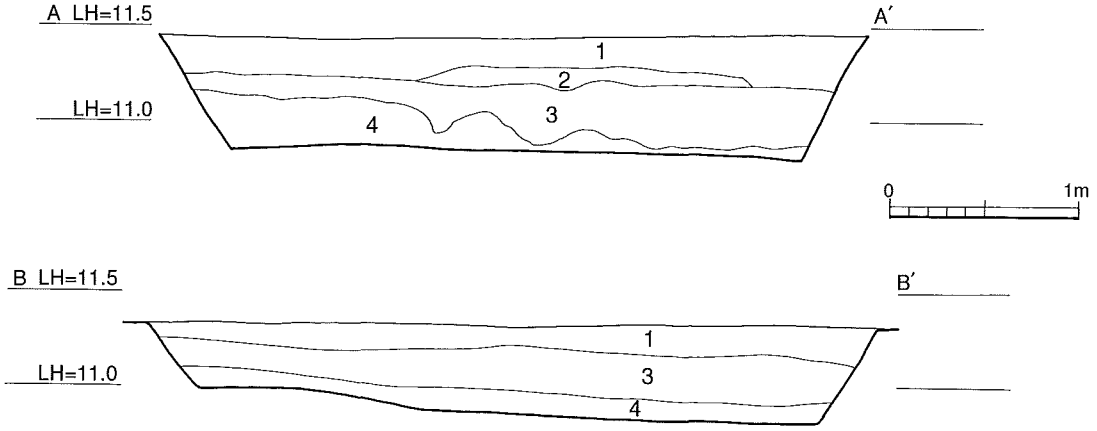


Fig26　D調査地土層図（1/40）

土層番号	土　色	注　記	備　考
1層	明黄橙色土層	造成などによる客土層。	
2層	暗茶褐色弱粘質土層	造成などによる客土層。	
3層	暗茶褐色弱粘質土層	遺物包含層で，主に須恵器や土師器を含むが，あまり数は多くない。	A調査地2層，E調査地7層，F調査地2層に相当
4層	明褐色粘質土層	遺構確認面。	A調査地3層，E調査地8層，F調査地3層に相当

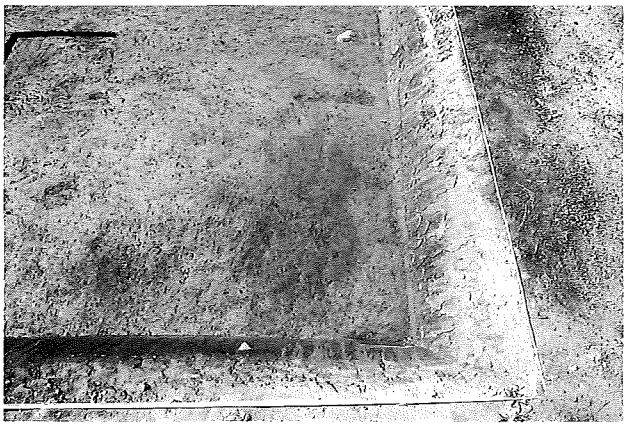
Tab14　D調査地土層観察表

(3) 遺構・遺物

①1号不明土坑

・遺構（Fig27，Pho 9）

②区北側で検出した。最長径115cm，深さ40cmを測る。遺構全体の印象としては遺構中央部がくびれる「落花生」形状をなすが，南側では中央部から突出する箇所があり，歪なプランを示す。遺構確認面である4層に掘り込まれる。充填土は4層よりやや暗い色調であるが，ほぼ同色質である。充填土が若干柔らかい質感である程度の差で，不明確な遺構線であった。検出当初は土壙墓の可能性も検討されたが，可能性は極めて低いと思われる。



Pho 9　D調査地1号不明土坑検出状況（東から）

・遺物（Fig28）

土器片が２点出土した。１は土師器甕の口縁部である。摩滅が激しく，調整方法は不明である。２は須恵器甕の胴部片である。表面が格子目タタキ，裏は青海波状当木の痕跡が残る。

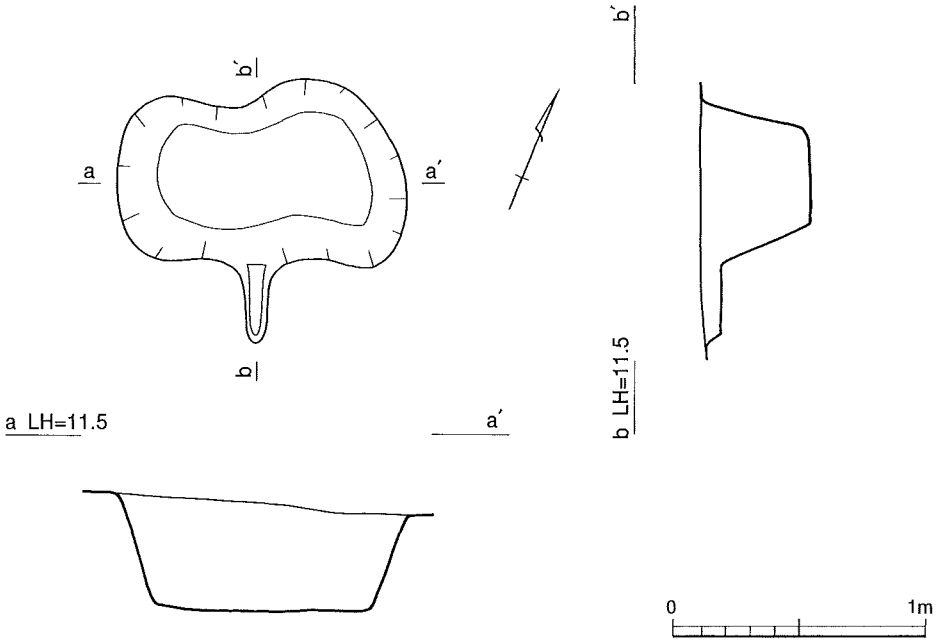


Fig27　Ｄ調査地１号不明土坑実測図（１/30）

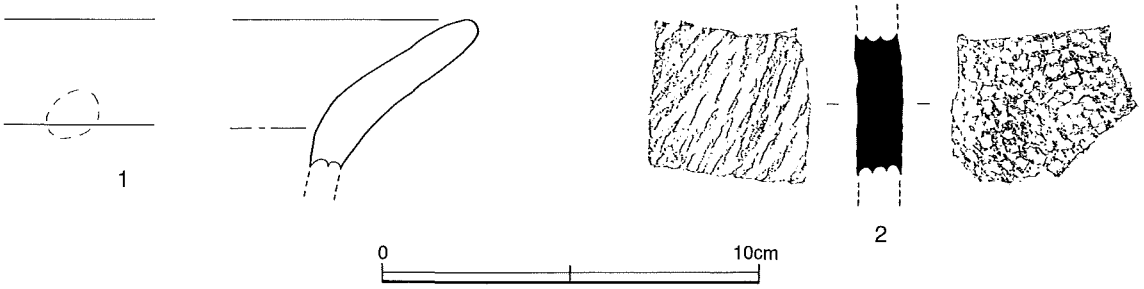


Fig28　Ｄ調査地１号不明土坑出土遺物実測図（１/２）

報告番号	調査区　遺構 調整手法	層位	色調番号（表）	胎土	器種	残存状況	備考
1	Ｄ　１号土坑 表裏とも摩滅が激しく識別不能	－	Hue5YR6/6	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	土師器
2	Ｄ　１号土坑 表：格子目タタキ痕　裏：青海波状当木痕	－	Hue2.5Y5/1	石英・金雲母	甕	胴部	須恵器

Tab15　Ｄ調査地１号不明土坑出土遺物観察表

②包含層出土遺物（Fig29，Tab16）

1は弥生式土器の底部である。器種は甕であろうか。2は須恵器の皿である。口縁部がさらに外反する。表裏ともに轆轤整形痕が認められる。3は須恵器の坏である。見込には指ナデによる痕跡が認められる。4は須恵器甕の胴部破片である。表にタタキ目痕が残る。5は近世磁器の瓶である。内面は轆轤整形痕が残り露胎である。高台の外側面が内傾し，畳付は逆三角形に削り出され，接地面が狭くなっている。

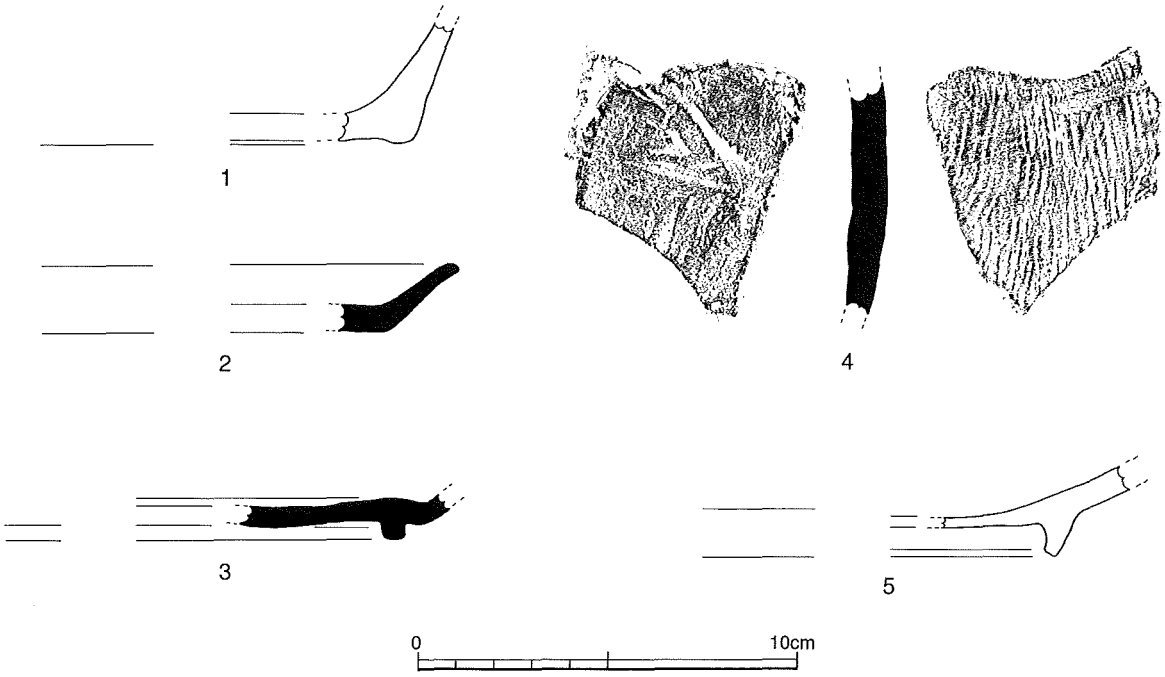


Fig29　D調査地包含層出土遺物実測図（1/2）

報告番号	調査区　出土層位 調整手法	色調番号（表）	胎土	器種	残存状況	備考
1	D　包含層	Hue2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	甕	底部破片	弥生式土器
2	D　包含層	Hue10YR6/2	長石	皿	破片	須恵器
3	D　包含層 見込：指ナデ	HueN6/0	石英・金雲母	坏	底部破片	須恵器
4	D　包含層 表：タタキ目	Hue2.5Y6/2	長石・石英	甕	胴部破片	須恵器
5	D　包含層 高台：外側面が内傾　畳付：接地面が逆三角形状に削り出し　内面：露胎	Hue10GY8/1		瓶	高台部破片	近世磁器

Tab16　D調査地包含層出土遺物観察表

5．E 調 査 地

(1) 調査地の概要

①所在地：壱岐市石田町石田西触字大川642-4・642-1・645-2

②調査地面積：476.04㎡

③調査地現況

県道に隣接する住宅跡地および耕作地である。北から南へなだらかに傾斜し，調査地南には小川川が流れる。旧地形は小川川へ傾斜すると想定していたが，小川川に最も近い①区では10cmほどの掘り下げで岩脈が露出した。

E調査地西側の水田にはH10範囲確認調査において１～４区が設定されている。２区からは時期不明の柱穴15基が確認されている。

(2) 基本層序（Fig30A-A′・B-B′・C-C′→Fig31，Tab17）

１層から５層は耕作地造成時の客土と思われる。当初，４層を地山と判断していたが，トレンチを掘削して確認を行った結果，造成時の客土であることが判明した。

６層から７層が遺物包含層にあたる。６層にはあまり遺物は含まれないが，７層からは摩滅した土師器片や須恵器片が多く出土した。また８層に掘り込まれた遺構の充填土でもある。８層上面が遺構確認面となる。８層下部の土壌を火山灰分析（附編参照）したところ，姶良Tn火山灰（約2.4～2.5万年前）や鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：約6,300年前）に由来する可能性が高いとの報告がなされている。

(3) 遺構・遺物

①住居跡

・遺構（Fig32，Pho２・10）

古代の住居跡と思われ，⑥区および⑦区で検出した。検出長辺435cm，深さ20cmを測る。遺構西側で柱穴２基が確認され，柱穴①は直径37cm深さ16cm，柱穴②は直径42cm深さ27cmを測る。東側の柱穴は確認されなかった。サブトレンチによる土層観察から住居跡の床面が凹凸であることが確認された。貼り粘土などの補強はなされていない。

・遺物（Fig32，Tab18）

１は不明鉄製品である。２は剥片鏃である。主要剥離面と背面における剥離痕が交互剥離となり，鈴桶技法の特徴を示す。縄文時代後期中葉頃のものと考えられ，混入と判断した。３～４は土師器の皿である。５は土師器の蓋である。把手は上端部がややふくらみを持ち，下部に鈍いくびれがある。４～５は瓦質に近い焼成である。６は須恵器の蓋である。表裏とも轆轤調整痕が認められる。

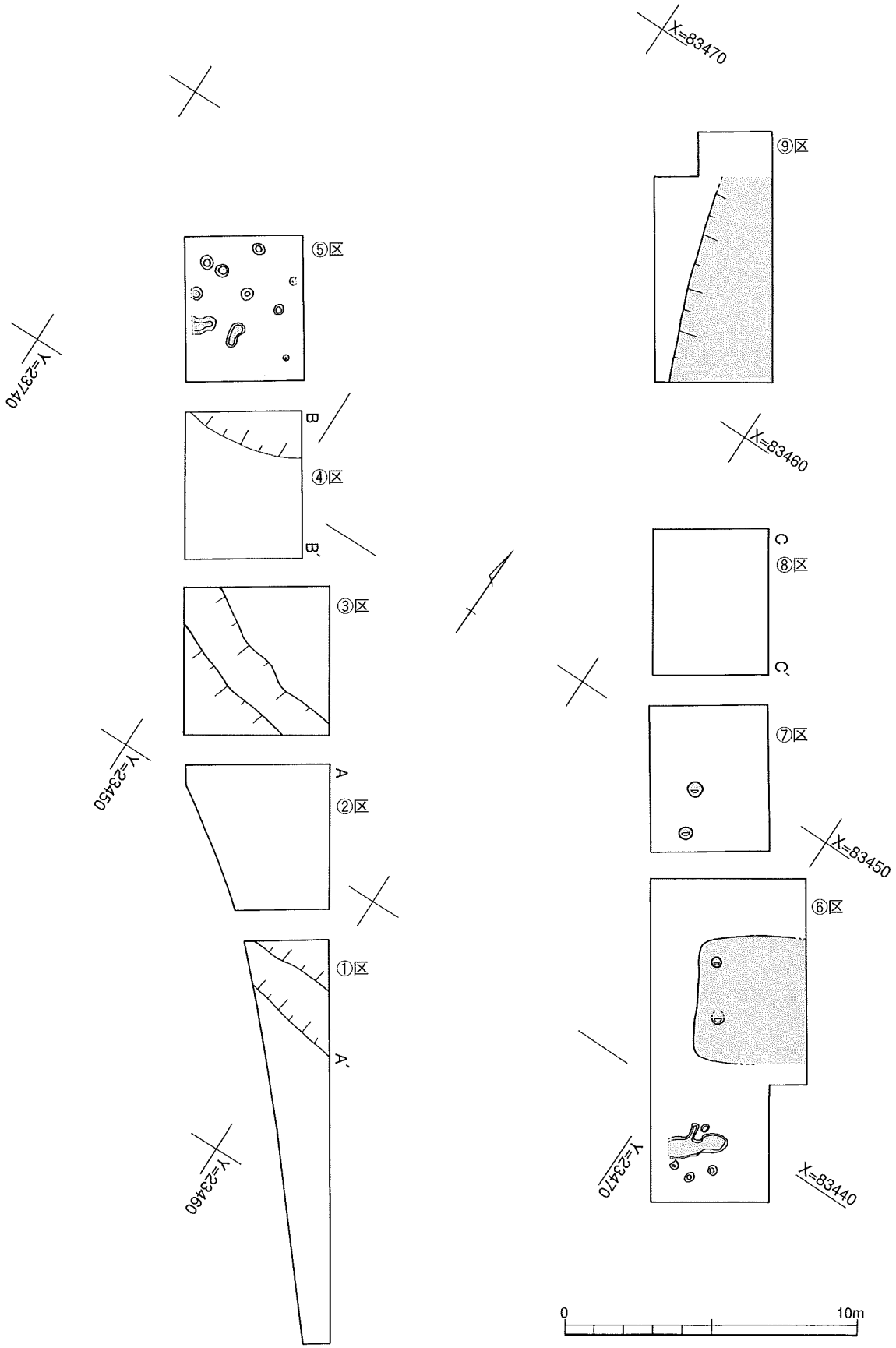


Fig30　E調査地平面図（1/200）

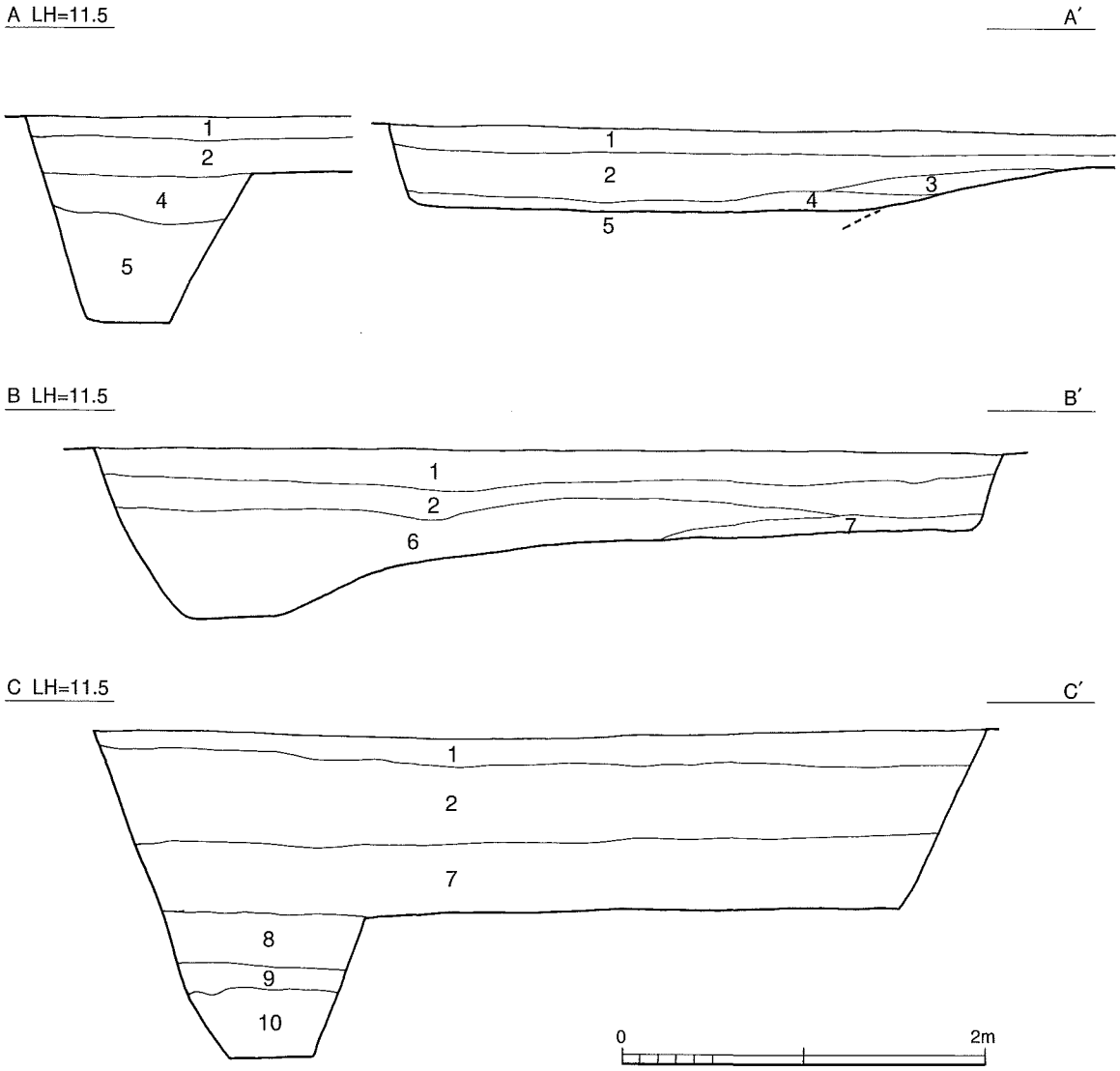


Fig31　E調査地土層図（1/40）

土層番号	土　色	注　記	備　考
1層	黒褐色土層	腐葉土を含む耕作土。	耕作土
2層	褐色土層	耕作土の下部。酸化鉄粒のような斑紋が入る。	耕作土
3層	黒色混小礫炭化物土層	小礫や炭化物，ガラス片などが多く混入する。	客土
4層	淡暗紫土層	淡い紫色を呈するパサパサした硬質の風化礫土。	客土
5層	黒茶色斑状土層	パサパサした黒や茶色の風化礫土がマーブル状に堆積。	客土
6層	茶褐色土層	E調査地④～⑤区間の落ち込みに堆積する土層。7層よりもやや明るい。	
7層	暗茶褐色弱粘質土層	遺物包含層で主に須恵器や土師器を含む。一部に弥生式土器も見受けられるが，摩滅が激しい。粘質を持つ下部と，粘質の弱い上層に分層されそうだが，判然としない。	A調査地2層，D調査地3層，F調査地2層に相当
8層	明褐色粘質土層	住居跡などの遺構確認面。粘質土でよくしまっている。この層には遺物は含まれない。本来，旧石器時代の遺物を包含する層位と思われる。	A調査地3層，D調査地4層，F調査地3層に相当 ※自然化学分析4層
9層	暗黒褐色粘質土層	旧石器時代の堆積である，いわゆる「ブラックバンド」に似る。9層よりもやや柔らかく，粘質が強い。	※自然化学分析5層
10層	灰黄白色弱粘質土層	上部は粘質をもつが，下部になると鉄分などの凝固したものが混入し，赤褐色となる。玄武岩の小礫も散在することから，玄武岩風化層と思われる。	※自然化学分析6層

Tab17　E調査地土層観察表

②Pit 群

・遺構（Fig33，Pho11）

Pit①～②は⑦区で検出した。Pit①は最長径50cm深さ26cm，Pit②は最長径50cm深さ12cmを測る。Pit③～⑥は⑥区で検出した。Pit③は最長径28cm深さ６cm，Pit④は最長径30cm深さ21cm，Pit⑤は最長径33cm深さ20cm，Pit⑥は最長径34cm深さ15cmを測る。Pit⑦～⑯は⑤区で検出した。Pit⑦は最長径45cm深さ18cm，Pit⑧は最長径30cm深さ14cm，Pit⑨は最長径47cm深さ７cm，Pit⑩は最長径49cm深さ23cm，Pit⑪は最長径46cm深さ20cm，Pit⑫は最長径37cm深さ10cm，Pit⑬は最長径42cm深さ６cm，Pit⑭は最長径77cm深さ16cm，Pit⑮は最長径22cm深さ22cm，Pit⑯は最長径22cm深さ26cmを測る。これら Pit 群から建物跡と判断されるプランは見受けられないと思われる。

・遺物（Fig33，Tab18）

７は土師器の坏である。摩滅が著しく調整方法は不明である。焼成状態は瓦質に近い。８は須恵器の蓋である。

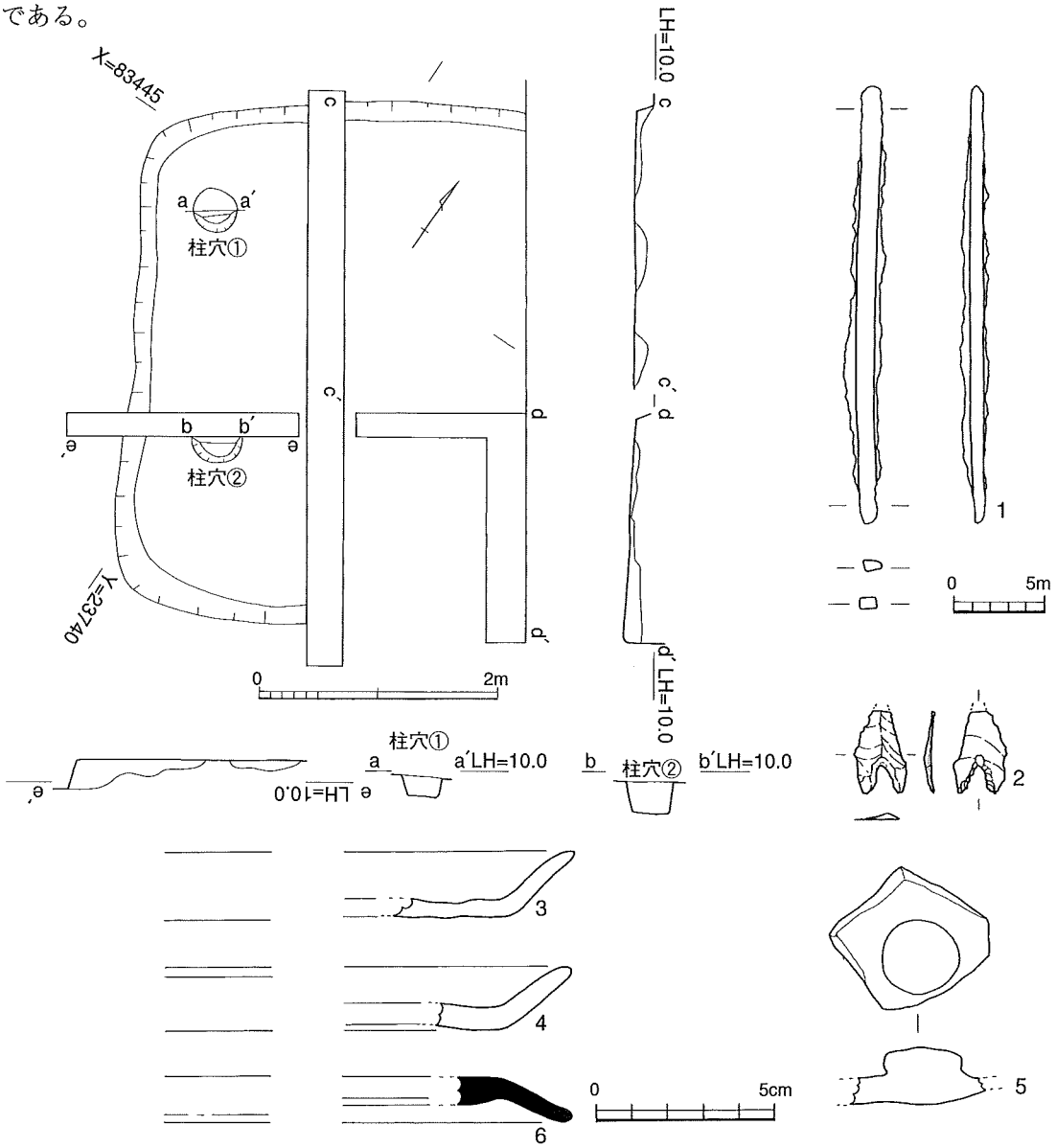


Fig32　E調査地住居跡（１/60）および住居跡出土遺物（１/２※１＝１/４）実測図

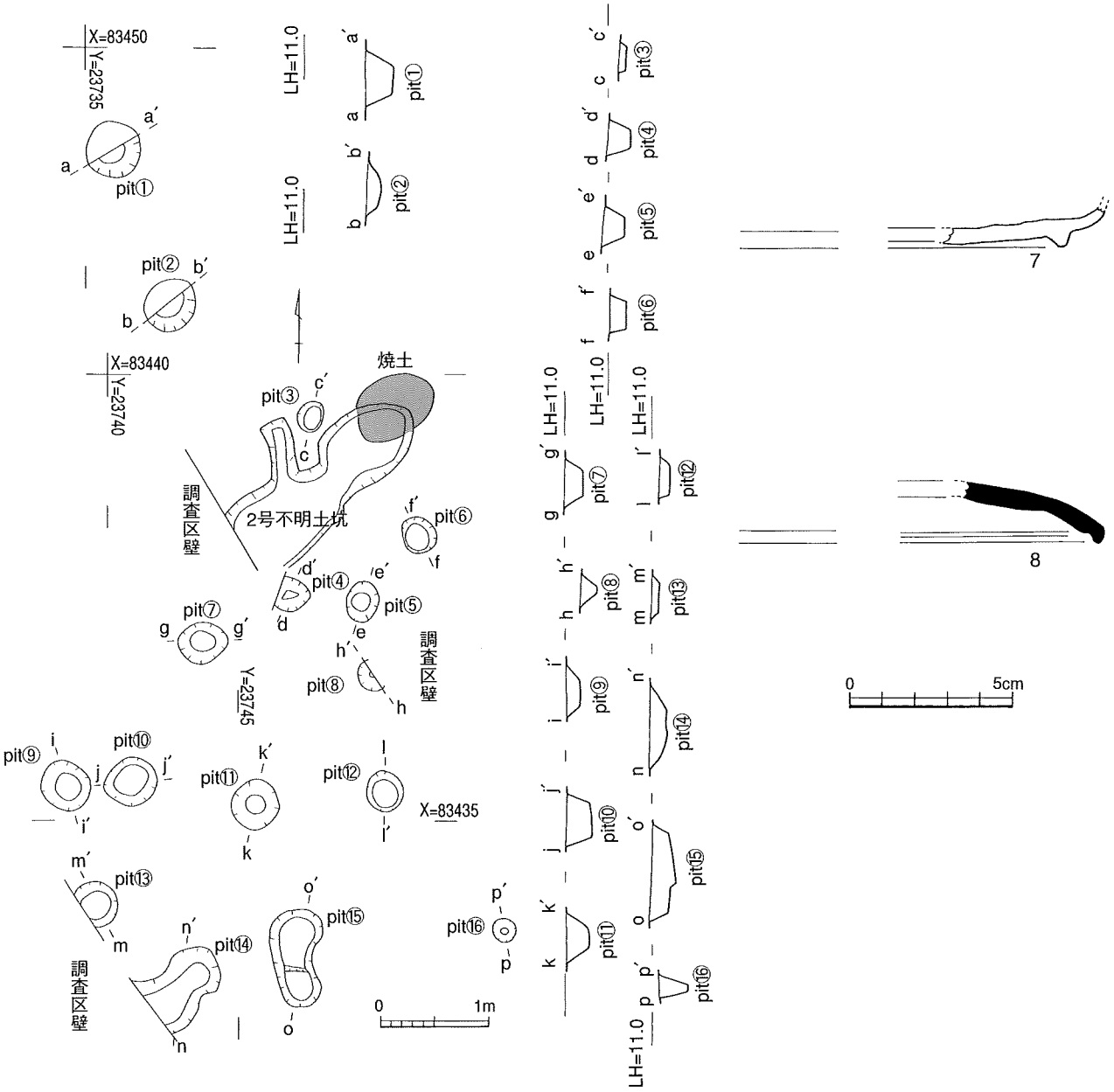


Fig33　E調査地 Pit 群・2号不明土坑（1/60）および Pit 出土遺物（1/2）実測図

報告番号	調査区　遺構　層位　長(cm)　幅(cm)　高·厚(cm)　重量(g)　器種　素材 備考
1	E　住居跡　－　24.3　0.9　0.7　124.2　不明　鉄 馬鍬か？
2	E　住居跡　－　2.35　1.5　0.35　0.5　剥片鏃　漆黒色黒曜石 縄文時代後期中葉頃のものと考えられ，混入と判断

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号（表）　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
3	E　住居跡　－　Hue2.5Y7/2　長石　皿　破片　土師器 摩滅が激しく調整方法不明
4	E　住居跡　－　Hue5Y6/1　長石・石英　皿　破片　土師器 摩滅が激しく調整方法不明
5	E　住居跡　－　Hue10Y7/1　長石・石英　蓋　把手　土師器 把手上部はややふくらみ，下部に鈍いくびれ
6	E　住居跡　－　Hue5Y6/1　石英　蓋　破片　須恵器 表裏とも轆轤調整痕
7	E　Pit　－　Hue5Y7/2　長石　坏　底部破片　土師器 摩滅が激しく調整方法不明
8	E　Pit　－　HueN6/　長石　蓋　口縁部破片　須恵器 表裏とも轆轤整形痕

Tab18　E調査地住居跡・Pit 群出土遺物観察表

③２号不明土坑

・遺構（Fig33）

⑥区の西側で検出した。検出最長195cm最大幅75cm深さ７cmを測る。全体的には楕円形だが，北側に突出する箇所があり，歪なプランを呈する。遺構の北東部分では赤褐色焦土が見られた。摩滅の激しい土師器片が数点出土したが，時期判断は困難である。遺構の性格は不明である。

④不明遺構

・遺構（Fig34）

⑩区で検出した。検出当初は傾斜か落ち込みと推測したが，遺構西側の立ち上がり線が極めてシャープであること，遺構東側が再び立ち上がって床面がレンズ状になることから，何らかの遺構である可能性が高いと思われるが，詳細は不明である。

⑤包含層出土遺物（Fig35～36，Tab19）

３を除く１～11の資料は須恵器で，ほとんどが破片資料である。３は頸部下に縄蓆文を配した短頸壷の破片である。縄蓆文は緻密で，頸部にまで及んでいるが頸部については，ナデ消している。また，最終的に先鋭な並行沈線５条を胴部上半部に施す。頸部が短く，胴部が球体となる短頸壷となるであろう。４は坏蓋で，天井部は緩やかに勾配し，口唇部外面に突起を持つ。外面にの体部にヘラ状のもので放射状の文様を描いている。５は坏で，胎土に砂粒を多く含み黄桃色を呈する。底部調整は明確ではないが，ヘラ起しで，見込み中央部に指オサエが認められる。全体的に厚手で中世に属するものか。４・５・７・８・10は須恵器の坏身部分で，高台は低く体部は丸く立ち上がる。高台が低く外側

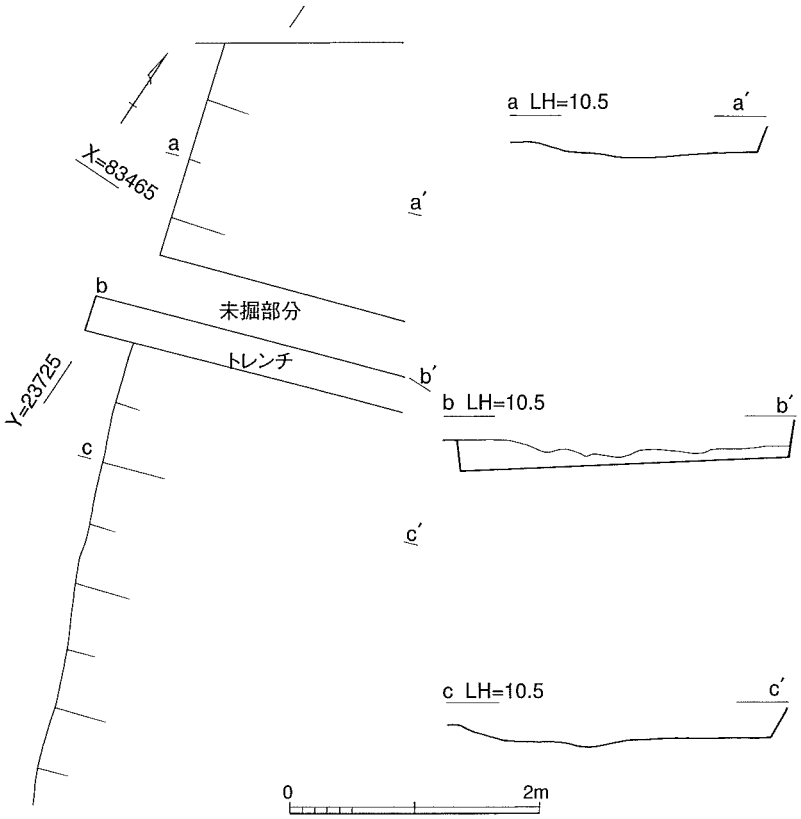


Fig34　E調査地不明遺構実測図（１/60）

につくことから，比較的新しい時期の所産と考えられる。6・9は坏蓋のつまみ部分で，6はほぼ垂直に立ち上がり，頂部も平坦に調整されているが，9はつまみ部の立ち上がりが外頃し，頂部もやや宝珠状になるが退化している。

12は越州窯系青磁の高台部である。平底で体部下半部は露胎であることから，土橋分類のⅡD類に属するものであろう（**土橋1995**）。見込みの釉薬は濁白色を呈し，胎土に黒色の粒子が見られる。

以上の遺物は，ほぼ8世紀の後半代～10世紀代に収まる時期のものと考えられ，検出したピット等の遺構もほぼこの時代の遺構として捉えることができる。

13～16は土師甕と皿である。すべて表面の摩滅が激しく，調整等については判別しにくい状況にある。13は外が灰褐色，内部は黄灰色を呈する甕の口縁部で，内部は削り痕が顕著であるが，かなり摩滅している。胎土は灰濁色で石英粒が目立つ。口縁部直下に，ふきこぼれのススが若干付着している。14・15は器高が低く，口径が広い土師皿で，15については，見込みの底部と体部の間に鋭い沈線が認められる。他の陶磁器等から考えると，8世紀後半～10世紀代の遺物として捉えられよう。

【参考文献】

土橋理子（1995）11.貿易陶磁器〔1〕初期貿易陶磁器『概説　中世の土器・陶磁器』－中世土器研究会編－真陽社

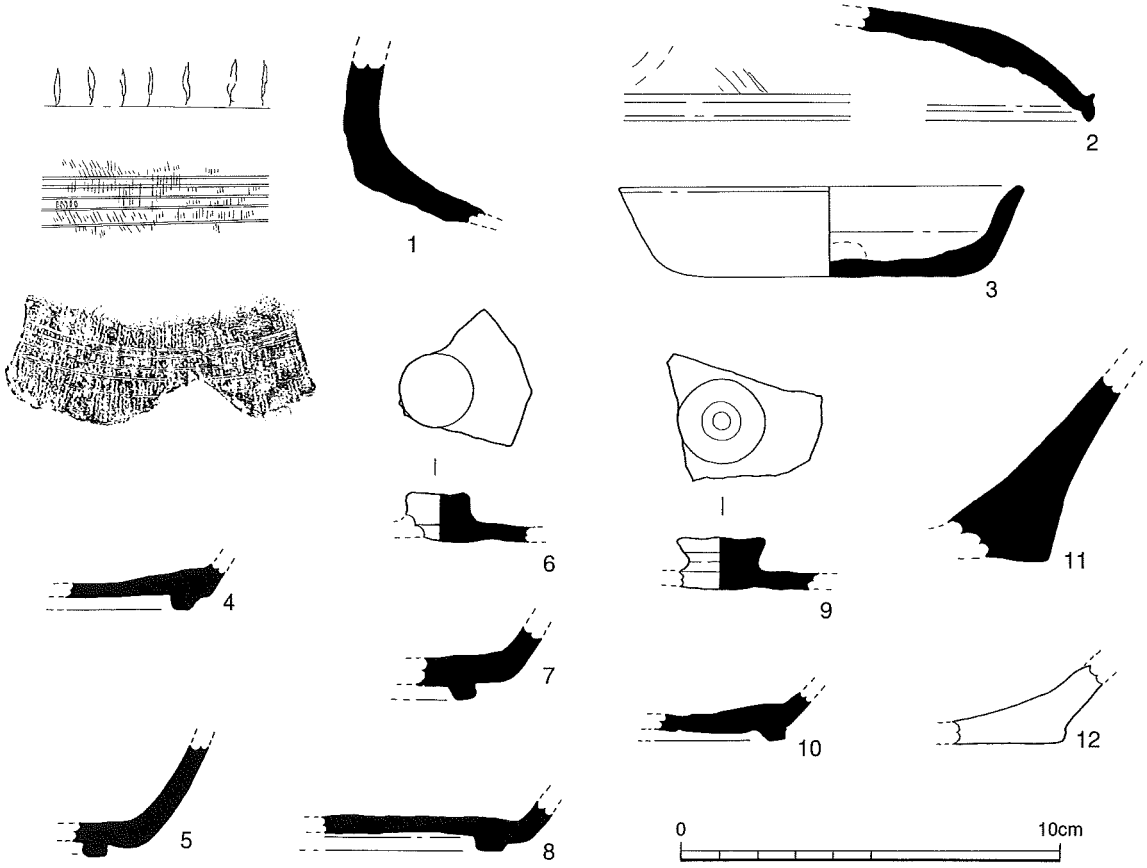


Fig35　E調査地包含層出土遺物実測図①（1/2）

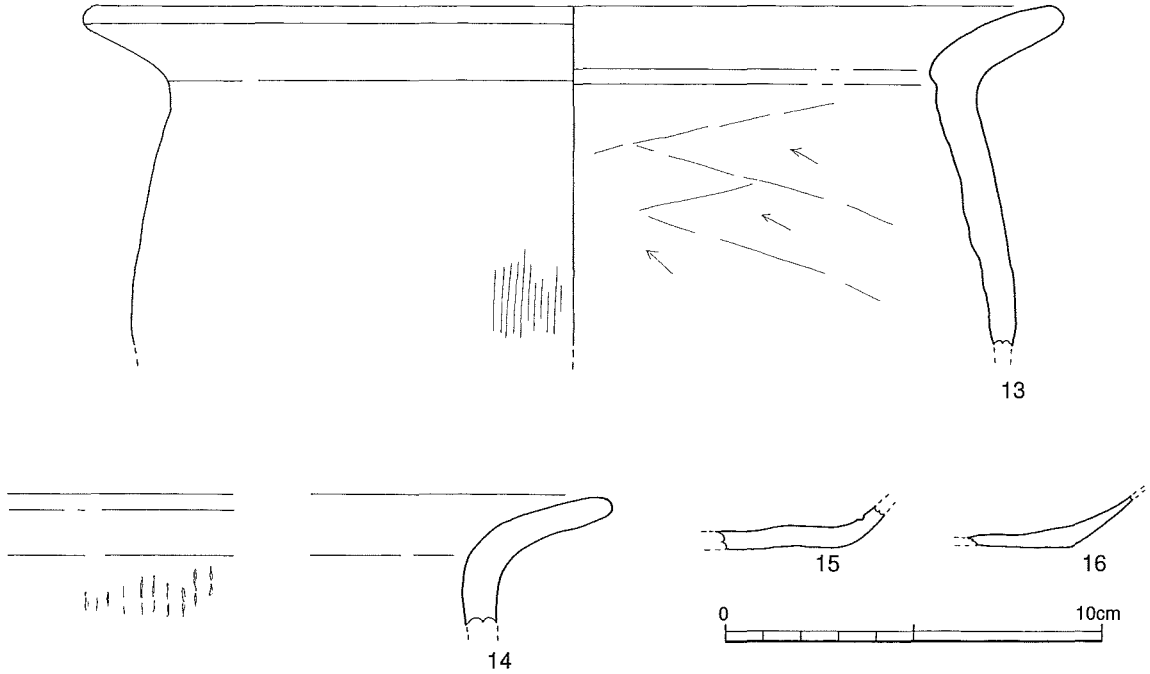


Fig36　E調査地包含層出土遺物実測図②（1/2）

報告番号	調査区　出土層位　色調番号（表）　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	E　包含層　Hue5Y　石英・長石　甕　口縁～胴部　縄蓆文 頚部下に縄蓆文を配した短頸壷で，縄蓆文は緻密で，一部撫で消す。
2	E　包含層　N灰6/0　石英・長石・金雲母　蓋　天井部 体高が低く口唇部は丸く納める。体部にヘラで放射状の文様を描く。
3	E　包含層　Hue7.5　石英・長石・金雲母　坏身　破片　土師器　中世 底部調整は明確ではないが，ヘラおこし。見込み中央部に指押さえ痕。
4	E　包含層　Hue5Y4/1　石英・長石　坏身　破片　須恵器
5	E　包含層　Hue　石英・金雲母　坏身　破片　須恵器
6	E　包含層　N灰6/0　石英・長石　蓋　破片　須恵器　つまみ部
7	E　包含層　HueN5/0　石英・金雲母　坏身　破片　須恵器
8	E　包含層　Hue7.5Y　石英　坏身　破片　須恵器 高台が低く外側に付く。
9	E　包含層　10BG青灰　石英・長石　坏蓋　破片　須恵器
10	E　包含層　HueN5/0　石英・金雲母　坏身　破片　須恵器
11	E　包含層　Hue7.5YR　石英・長石・金雲母　甕　破片　須恵器
12	E　包含層　Hue7.5YR　碗　底部破片　越州窯系青磁碗Ⅱ類 平底で体部下半は露胎。見込みの釉薬は濁白色を呈し，胎土に黒色粒子。
13	E　包含層　Hue7.5YR　石英・長石・金雲母　甕　口縁～胴部　土師器
14	E　包含層　Hue5YR　石英・長石・金雲母　甕　口縁　土師器
15	E　包含層　Hue7.5YR　石英・長石・金雲母　皿　底部破片　土師器
16	E　包含層　Hue5YR　石英・長石・金雲母　皿　底部破片　土師器

Tab19　E調査地包含層出土遺物観察表

6．F 調 査 地

(1) 調査地の概要

①**所在地**：壱岐市石田町石田西触

②**調査地面積**：210㎡

③**調査地現況**

大川橋の北約80m地点から約125m地点までの県道で，調査区全長45m，幅4.5m（一部３m）である。E調査区同様，北から南へ緩やかに傾斜する。

(2) 基本層序（Fig37A-A′→Fig38，Tab20）

基本的にはE調査地層序と対応する。１層は県道敷設時に造成された客土と思われる。２層はかつての耕作土と思われる。３層が遺物包含層で，４層に掘り込まれる遺構の充填土でもある。

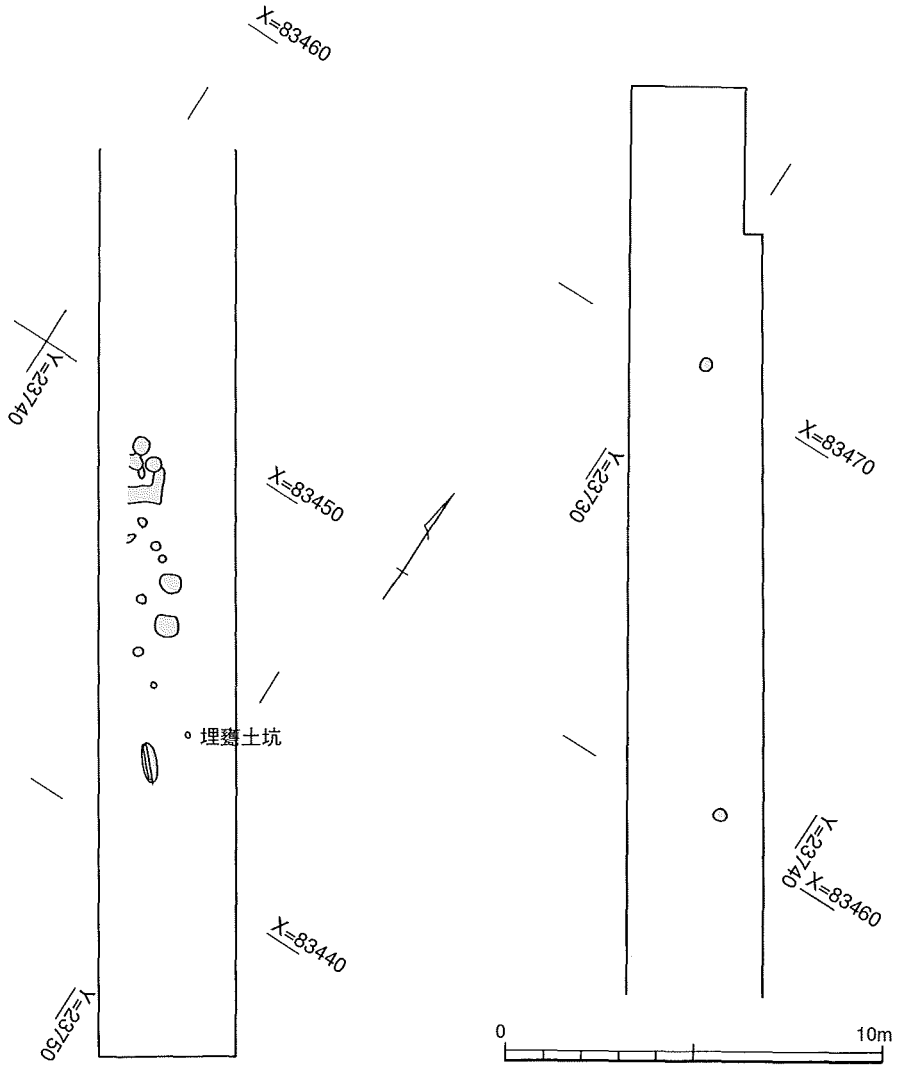


Fig37　F調査地平面図（1/200）

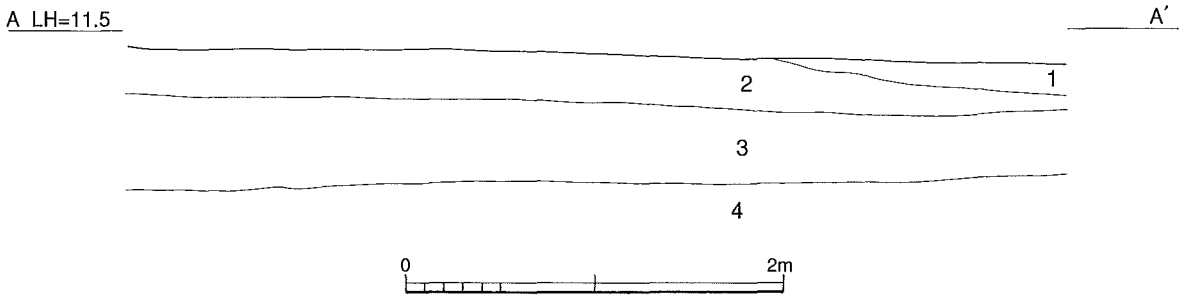


Fig38　F調査地土層図（1/40）

土層番号	土　色	注　記	備　考
1層	明黄褐色土層	客土。	
2層	褐色土層	耕作土。	E調査地2層に相当
3層	暗茶褐色弱粘質土層	遺物包含層で主に須恵器や土師器を含む。	D調査地3層およびE調査地7層に相当
4層	明褐色粘質土層	遺構確認面。	D調査地4層およびE調査地8層に相当

Tab20　F調査地土層観察表

(3) 遺構・遺物

①埋甕土坑

・遺構（Fig39，Pho 3・12）

調査区の南側で検出した。検出した箇所は，北側よりやや微高地になる部分で，上部はすでに削平されていた。掘り込み面はⅢ層上部で，土坑は幅30cm，深さ17cmを測る。甕は，垂直に立てられ甕の底部に納まる様に皿を置いてあった。状況からして埋納を意図しており，祭祀に関係する遺構と判断した。

・遺物（Fig40）

1は土師甕である。上下破損しているが，下部の破損は意識的なものであり，打ち欠いている。上部は削平に伴い破損している。本来は口縁部まで残存していたものと考えられる。甕の残存高は14.5cmで，径24cmを測る。体部にはススが付着し，内部も下半部にススが付着している。外面は条痕状の叩き整形を行い，内部については幅が広い削り痕が残り器体の厚みを薄く仕上げている。内面下部にススが底面を一周するように付着しているが，これについては，ススのラインと土師皿のおかれたラインが同じであり，土師皿の口縁部直下にもこのラインが認められることから，土師皿を置いた後に被熱した結果であると考えられる。2は土師皿である。口径18cm，器高1.5cmを測り，口径がかなり大きい。底部は被熱したためか，スス痕や，はじけ痕跡が観察される。このような状況から，土坑に入れる前に甕の底部を打ち欠き，皿を入れて熱した後に土坑に納めたということが推測される。当時の祭祀行為の一端を表すと考えられる。遺物については，8世紀後半のものか。

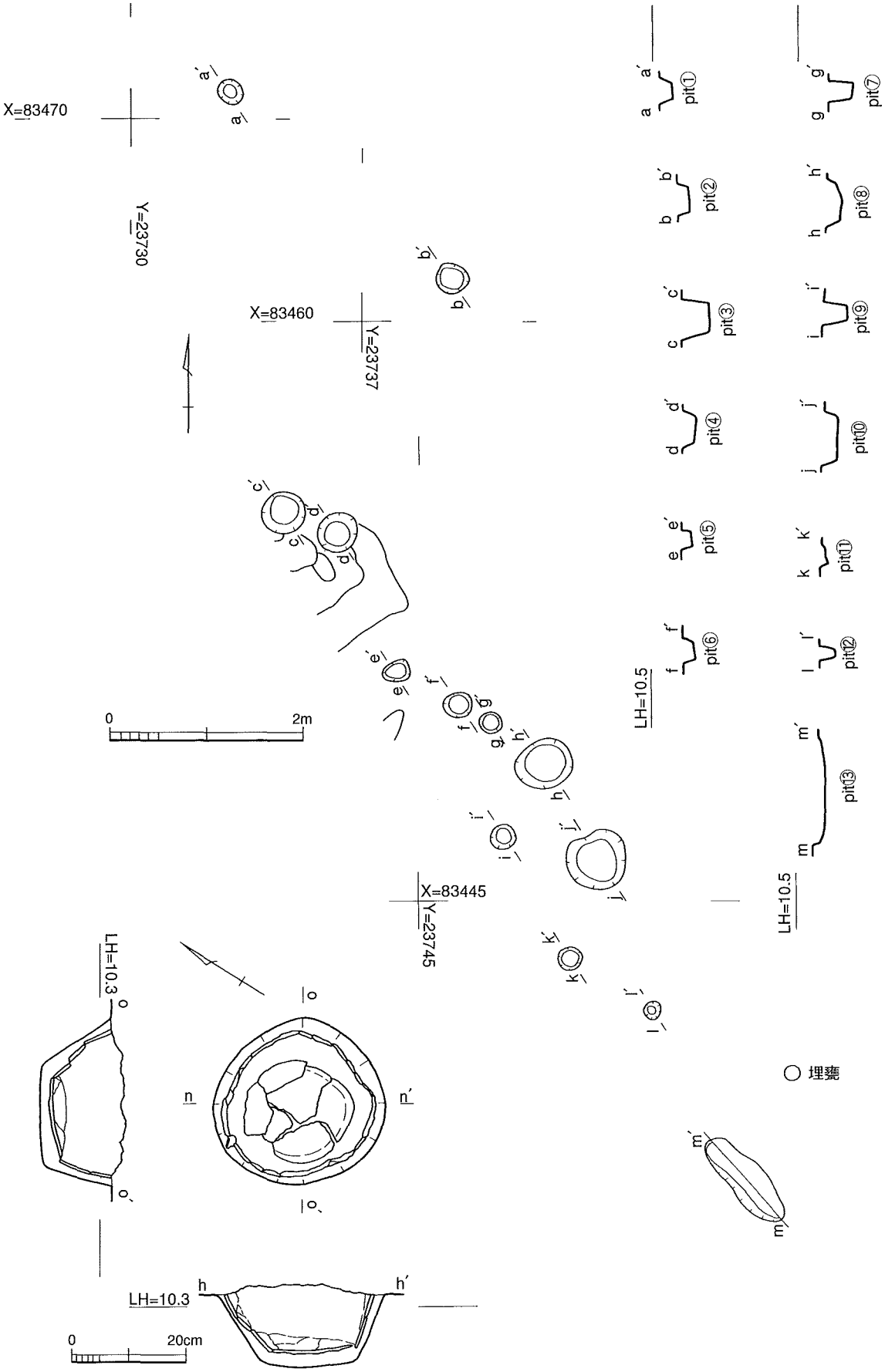


Fig39　F 調査地 Pit 群（1/60）および埋甕土坑（1/10）実測図

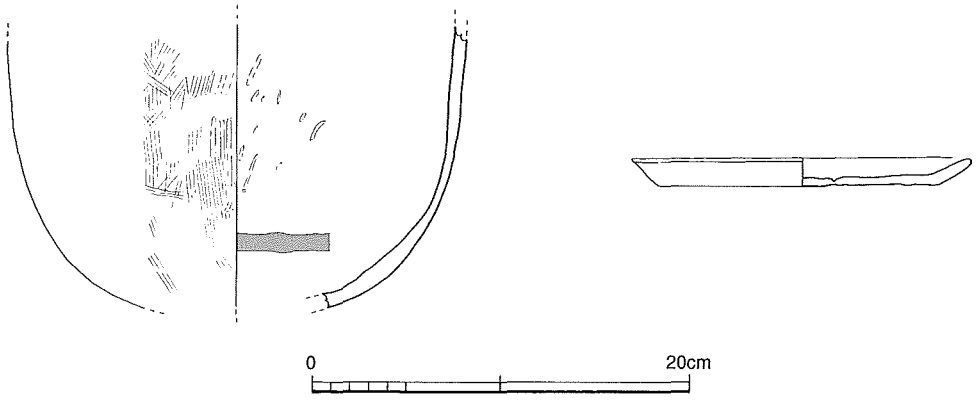


Fig40　F調査地埋甕土坑出土遺物実測図（1／4）

報告番号	調査区　遺構 調整手法	層位	色調番号（表）	胎土	器種	残存状況	備考
1	F　埋甕土坑 土師皿の装着部分下にスス痕が帯状に付着	－	Hue2.5YR3/4	石英・長石・金雲母	甕	胴部	土師器
2	E　埋甕土坑 底面が被熱により広範囲にわたり剥離　スス痕が付着	－	Hue7.5YR7/6	石英・長石・金雲母	皿	ほぼ完形	土師器

Tab21　F調査地埋甕土坑出土遺物観察表

②Pit群（Fig39，Pho12）

Pit①は最長径28cm深さ12cmを測る。Pit②は最長径32cm深さ12cmを測る。Pit③は最長径44cm深さ30cmを測る。Pit④は最長径39cm深さ13cmを測る。Pit⑤は最長径20cm深さ11cmを測る。Pit⑥は最長径26cm深さ13cmを測る。Pit⑦は最長径21cm深さ26cmを測る。Pit⑧は最長径50cm深さ16cmを測る。Pit⑨は最長径24cm深さ26cmを測る。Pit⑩は最長径57cm深さ16cmを測る。Pit⑪は最長径22cm深さ10cmを測る。Pit⑫は最長径16cm深さ16cmを測る。Pit⑬は最長径110cm深さ11cmを測る。上層に炭化物を多く含み，埋甕土坑にもっとも近い。両者には何らかの接点がある可能性がある。これらPit群に遺物は含まれていなかった。

E調査地Pit群と同様に，掘立柱建物などの住居跡と判断されるプランは見受けられない。E調査地およびF調査地を合わせた遺構配置からも，建物の柱穴らしき配置は見受けられないと思われる。

しかしながら，この一帯に遺構が集中する傾向は確認できる。そこで包含層から出土する遺物に何らかの傾向が現れないかと期待したが，遺物量も少なく，出土地点もまばらで，特に何らかの傾向を把握するには至らなかった。

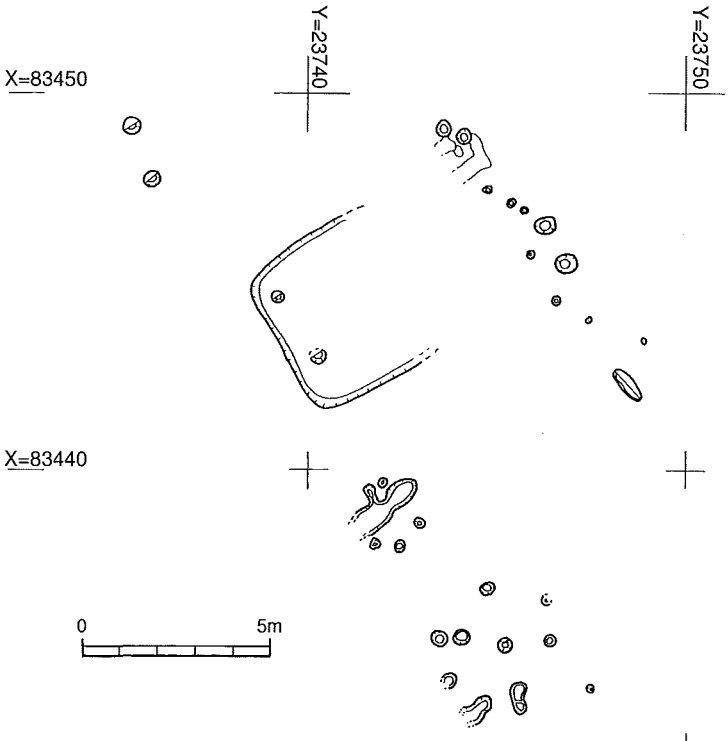


Fig41　E・F調査地遺構配置図（1/200）

Ⅳ章　本調査の総括

1．溝状遺構について

今回の調査対象地は，原の辻遺跡の中心の高台から南寄りの地域にあたり，過去の調査成果から，丘陵を取り巻く環濠や，墓地に関連する遺構，古代の遺構等の検出が予想される地域である。今回の調査で一部かなり削平を受けていることが明確となったが，Ａ調査地のように弥生時代の溝の底の部分が検出されたり，Ｅ・Ｆ調査地のように古代の柱穴や住居跡が検出されるなど，遺構の保存状況が地点によってかなり相違していた。これは地山の起伏が激しく，窪地になる場所では土の堆積が厚く，遺構の保存状況も良好で，地山が高いほど後世に削平をうけたことを示す結果となった。Ａ調査地の溝状遺構については底の部分だけしか確認していないが，これが環濠の底の部分にあたるのか，あるいは溝の底の部分かについては現段階では判断し得ない。時期的には弥生時代中期の段階を想定しなければならず，丘陵の主体部を巡る溝や環濠のさらに外側に広がる遺構と考える。原の辻遺跡の南側の環濠については過去の調査でも点的な調査しかおこなっていないが，これらの調査の中でＳ52範囲確認調査（**安楽・藤田1978**）で確認されたＶ字溝，Ｈ９範囲確認（**杉原1999**）における池田大原地区の調査で確認された１号濠，さらにはＨ10範囲確認（**安楽2000**）における苣ノ木地区検出の溝などとの関連を考える必要がある。Ｓ52範囲確認調査で確認されたＶ字溝は幅約２ｍ，深さ0.8ｍを測る。底面は今回検出した溝とは相違し，完全なＶ字形を呈していることから環濠として捉えることができると判断される。Ｈ８範囲確認調査で検出した１号濠については幅約２ｍ，底の幅約0.3ｍ，深さ約0.8ｍで断面Ｖ字形を呈し，時期的には須久Ⅱの古段階に位置づけている。この遺構に対して「遺跡の中心である舌状台地を取り巻く多重環濠の外に位置するが，この環濠の外での新たな防御線の存在がこれにより明らかになった」と報告されている。位置から考えるとＳ52のＶ字溝とＨ８の１号濠の両者に繋がりはないが，形状は近いと考えられる。Ｈ11範囲確認調査（**杉原2000**）における苣ノ木地区の溝は３つの中でも南側にあたり溝として捉えられているが，かなり浅い遺構で濠かどうかの判断もなされていない。現在，Ｈ８範囲確認調査の１号濠とＳ52範囲確認調査のＶ字溝については，中期の環濠の可能性があるとの判断が現段階でもなされている。この他，Ａ調査地周辺では，県道の側面で断面観察によりＶ字溝が確認されるなど，丘陵南側でも環濠と思われるものが幾つか確認されており，中期の時期を主体とするものとして捉えられている。今回調査をおこなった地区では，Ｈ８範囲確認調査で確認された１号濠がこの付近に取り付いてくる可能性があったが，どの調査区でも環濠を検出するに至らなかった。Ａ調査地の溝状遺構についても，上部はかなり削平されているが，断面形状はＶ字状にはなり得ず，溝と捉えたほうが無難であろう。遺物から考えると弥生時代のものであることは間違いなく，今後，今回の調査区の東西の調査で確認する必要がある。また，Ｓ52範囲確認調査のＶ字溝についても周辺調査が必要であり，今後さらに丘陵南側の環濠の実態を解明する必要がある。

Ｄ～Ｆ調査地では，Ｈ６圃場整備調査（**山下・川口1997**）における大川地区に隣接していることから，古代関連の遺構が検出される可能性があった。Ｈ６圃場整備調査では，越州窯系青磁・白磁Ⅰ類・長沙窯系水注の他，国産としては緑釉陶器・褐釉陶器などの遺物が出土している。初期貿易陶磁や緑釉陶器などの出土から，調査者は国司・郡司クラスの有力者の存在を考えている。遺構は確認されていないが，調査区の北側は微高地になっており，その頂部付近に何らかの遺構が存在する可能性が高

い。今回の調査区は，Ｈ６圃場整備の調査区中心地よりも約20～100㍍程西側の微高地に位置する。調査では竪穴式住居と思われる遺構の他，埋納土坑やピットが確認された。ピットの中には大形のものも存在したが，調査範囲が狭いことからそれ以上の確認はできていない。遺物も少数ながら土師器片・須恵器片・越州窯系青磁などが出土している。今回の調査区の出土遺物は，Ｈ６圃場整備調査に比べるとその量や内容にかなりの差がある。このことから，中心域からやや離れた，一般人の生活空間であったものとの可能性を示唆しておきたい。

２．埋甕土坑について

今回，Ｆ調査地で検出した埋甕土坑は，底部を丸く打ち欠いた甕の中に土師皿を敷いて埋納するという特殊な埋納形態をとっている。しかも，埋納する前に底部を打ち欠き皿を敷いた段階で，一度火を炊いている状況がうかがわれる。土師皿の底は火を受けて剥離しており，口縁部直下周縁には，ススが付着している。この部分と密着する甕の内部にも同様にススが内部を周回するように付着している。これらの状況からも，埋納する以前に，甕の底を打ち欠き，内部に皿をいれた状況で火を焚いたということが推測される。推測の域を出ないが，カマドやクド石の上に据えて火を焚き，何かの神事をおこなった後に，土坑の中に入れたと考えられる。土に帰すという意味合いでもあったのであろうか。どのような神事が執り行われたのか不明だが，古代の神事の一形態を示す資料である。周辺からはピットが確認されていることから，建物に関する地鎮をおこなったとするのが妥当であろう。今回は，この事実について他の事例についての検討をおこなっていないので，今後の検討課題としておくに止める。

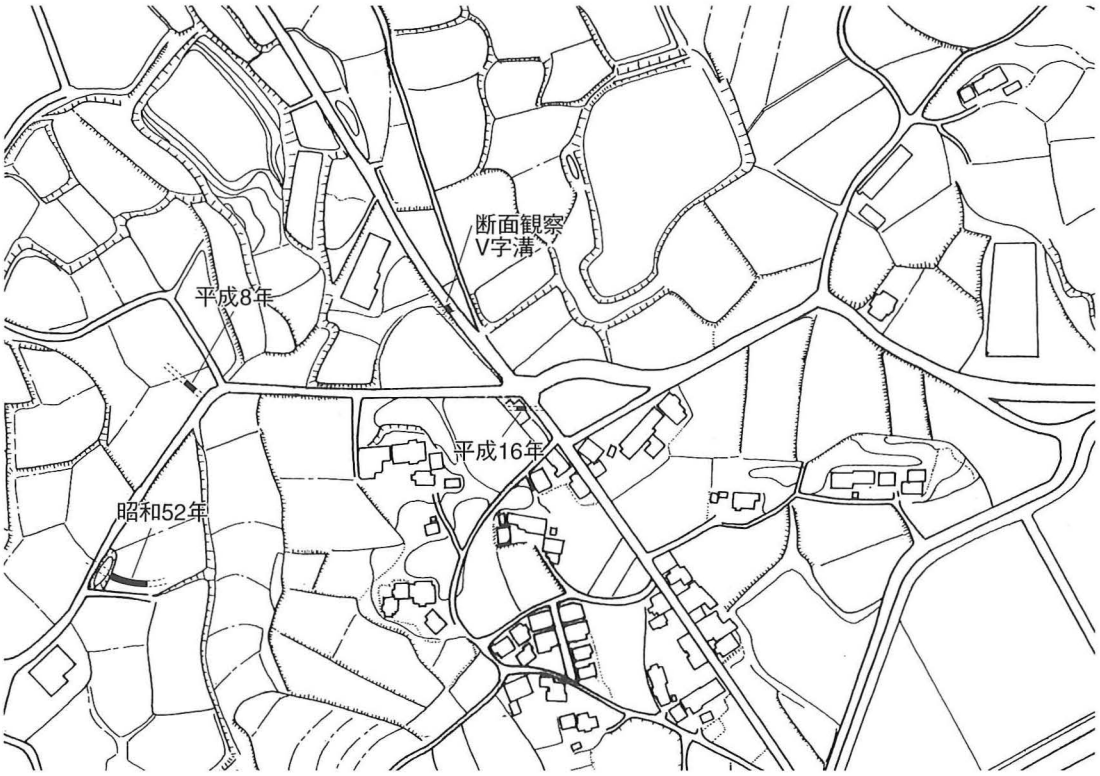
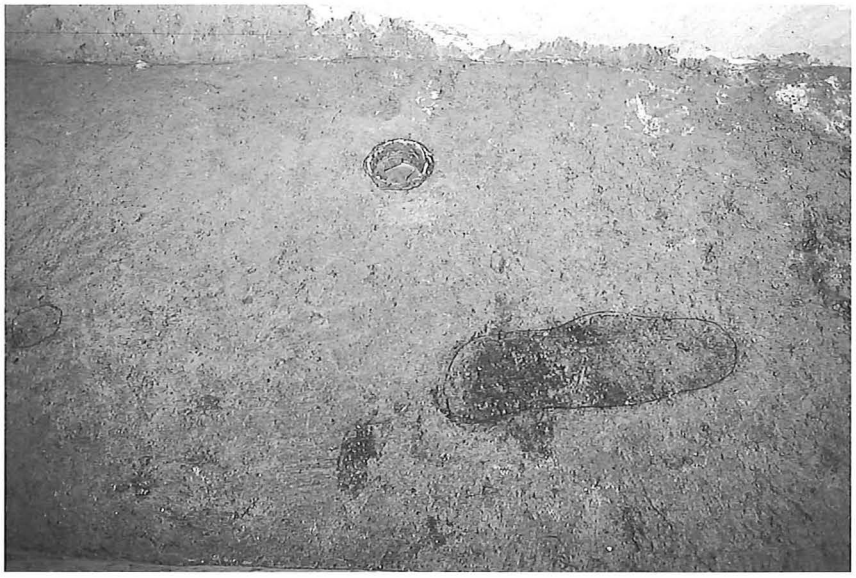


Fig42　Ａ調査地周辺の環濠等の位置図

Pho10
E調査地住居跡
検出状況（南から）

Pho11
E調査地 Pit 群
検出状況（西から）



Pho12
F調査地 Pit⑬および埋甕
土坑検出状況（西から）

附　　編

長崎県，原の辻遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

九州地方北部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には，阿蘇，姶良，鬼界，阿多など九州地方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には，噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり，これらとの層位関係を遺跡で求めることで，遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで壱岐島に位置する原の辻遺跡においても，火山ガラス比分析を行い指標テフラの検出同定を試みることになった。試料採取が行われた地点は，E調査区⑨区北壁である。

2．火山ガラス比分析

E調査区⑨区北壁において，発掘調査担当者により採取された3点の試料（図1）を対象に火山ガラス比分析を行い，試料に含まれる火山ガラスの特徴や量の層位的変化を把握した。分析の手順は次の通りである。

1）試料16gを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

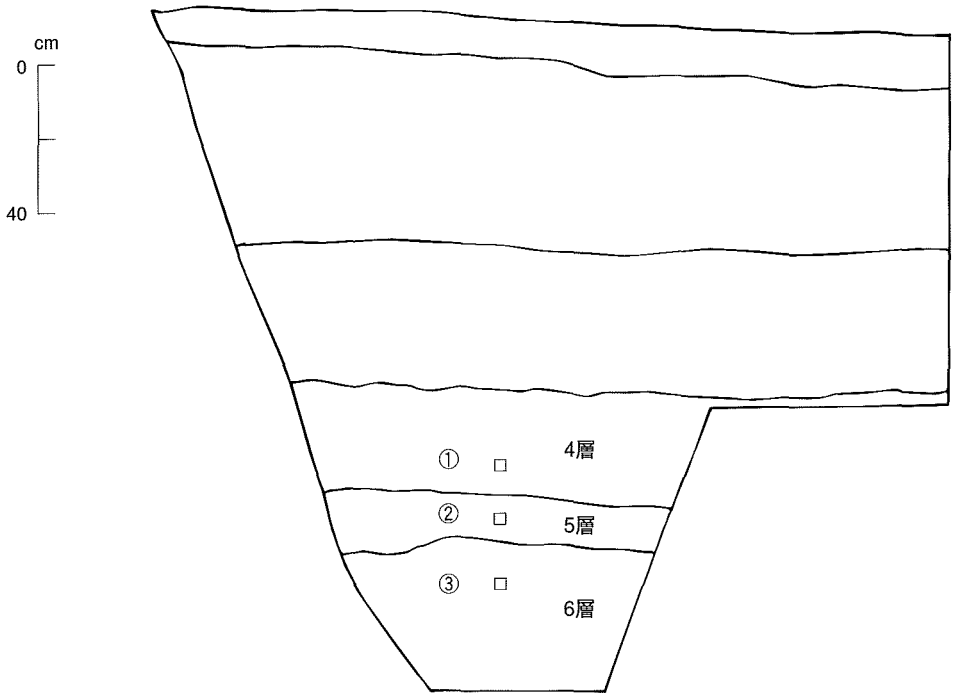


図1　分析試料の層位

4）分析篩により1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し，火山ガラスの色調形態別比率を求める。

分析結果

火山ガラス比分析の結果を，ダイヤグラムにして図2に示す。またその内訳を表1に示す。全体としていずれの試料にも比較的多くの火山ガラスが含まれている（11.6～32.0%）。3試料の中では，とくに試料②（5層）に多くの火山ガラスが含まれている（32.0%）。この試料では，量が多い順に透明のバブル型ガラス（28.8%），分厚い中間型ガラス（1.6%），繊維束状に発泡した軽石型ガラスおよび褐色のバブル型ガラス（各0.8%）が認められる。その下位の試料③（6層）には，量が多い順に透明のバブル型ガラス（10.8%），淡褐色のバブル型ガラスおよび中間型ガラス（各0.4%）が含まれている。一方，試料②（5層）より上位の試料①（4層）には，量が多い順に透明のバブル型ガラス（16.0%），中間型ガラス（1.2%），淡褐色および褐色のバブル型ガラス（各0.8%）が含まれている。

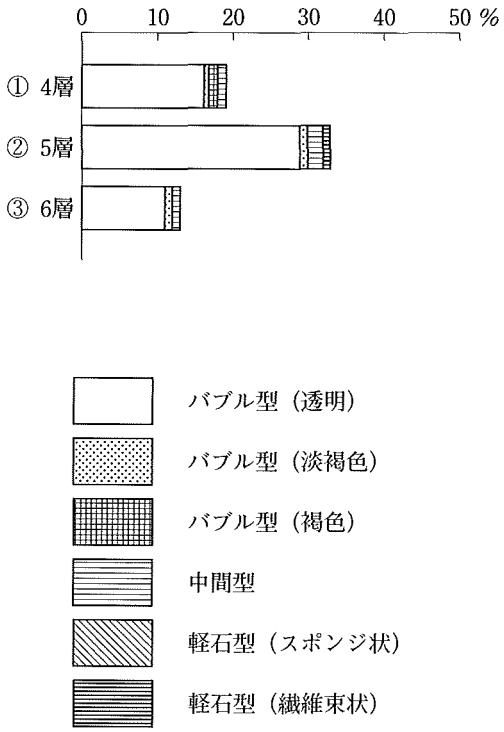


図2　火山ガラス比ダイヤグラム

表1　E調査区⑨区北壁の火山ガラス比分析結果

試料	土層	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
①	4層	40	2	2	3	0	0	203	250
②	5層	72	0	2	4	0	2	170	250
③	6層	27	1	0	1	0	0	221	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状。

3．考　　察

火山ガラスの検出量や形態さらに色調などから，今回検出された火山ガラスは，約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）や約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来する可能性が高いように思われる。一般に，褐色や淡褐色のバブル型ガラスはK-Ahに多く含まれているものの（町田・新井，1978），ATの噴出に関係した入戸火砕流堆積物にも量は少ないながら認められる（町田・新井，1992，上野，2001など）。そしてATからも，これら有色火山ガラスが検出されることがある。したがって，以上のデータでの高精度の識別は困難といえよう。ここでは，石器が検出された4層中～上部は少なくともATより上位にあ

る可能性が高いと指摘するにとどめたい。

なお上記のテフラ以外にも，約8.5～9.0万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火砕流堆積物（Aso-4pfl）も中・北部九州地方一帯に分布しており，それに関係する阿蘇4テフラ（Aso-4，町田ほか，1985，町田・新井，2003）は北海道を含めたはるかに広い範囲に降灰している。また約10.5～11万年前に阿多カルデラから噴出した阿多テフラ(Ata, Ui，1971，Nagaoka，1988，町田・新井，2003など）や約9.5万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ（K-Tz，Nagaoka，1988，町田ほか，1983a，太田・小田切，1994，町田・新井，2003)も壱岐島で検出される可能性がある。したがって，ATより下位の土層のみならずATの上位の土層からもこれらのテフラに由来するテフラ粒子が検出される可能性もある。これらテフラの高精度の同定は，火山ガラスや鉱物を対象とした屈折率測定や，信頼度の高いEPMAを利用した火山ガラスの主成分化学組成分析を組み合わせることで容易である。実際，韓半島の旧石器時代遺跡や中国においても，ATやK-Ahの同定には屈折率測定やEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析が実施されている（町田ほか，1983b，Eden *et al*.，1996，Yi *et al*.，1998など)。今後，原の辻遺跡においてもこれらの測定分析を実施して，検出される火山ガラスの起源を明らかにすることが期待される。

4．ま と め

原の辻遺跡E調査区⑨区北壁において採取された試料を対象に，火山ガラス比分析を行った。その結果，姶良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）あるいは鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前*1）に由来する可能性が高い火山ガラスが比較的多く検出された。このことから，少なくとも石器が検出された4層中～上部はATより上位にあると考えられる。

＊1　放射性炭素（^{14}C）年代。暦年較正年代については，ATが約2.6～2.9万年前，K-Ahが約7,300年前と考えられている（町田・新井，2003)。

【文献】

Eden, D., Froggatt, P.C., Zheng,H.and Machida, H.(1996)Volcanic glass found in Late Quaternary Chinese loess: A pointer for future studies? *Quat. Intern*., 34/35, p.107-111.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代。第四紀研究，34，p.377-379。

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学，46，p.339-347。

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰。第四紀研究，17，p.143-163。

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会，336p。

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇4火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－。火山，30，p.49-70。

町田　洋・新井房夫・長岡信治（1983a）広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比。日本第四紀学会講演要旨集，no.13，p.45-46。

町田　洋・新井房夫・李　炳鳶・森脇　広・江坂輝弥（1983b）韓半島と済州島で見いだされた九州起源の広域テフラ。地学雑，92，p.39-45。

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良 Tn 火山灰（AT）の^{14}C年代。第四紀研究，26，p.79-83。

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代。地質雑，99，p.787-798。

Nagaoka, S.(1988)The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. *Geogr. Rept Tokyo Metropol. Univ*., 23, p.49-122.

太田陽子・小田切聡子（1994）土佐湾南西岸の海成段丘と第四紀後期の地殻変動。地学雑，103，p.243-267。

上野龍之（2001）火山灰粒子組成の側方・垂直変化からみた入戸火砕流の堆積機構。火山，46，p.257-268。

Ui T.(1971)Genesis of magma and structure of magma chamber of several pyroclastic flows in Japan. *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Ser. II*,18, p.53-127.

Yi Seonbok, Soda, T. and Arai, F.(1998)New discovery of Aira Tn ash (AT)in Korea. *Jour. Kor. Geogr. Soc.*, p.447-454.

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	③
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者名	林　隆広
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	2006年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじ）	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20040616 ～ 20050208	1,000m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代	溝状遺構 不明土坑 Pit群	弥生式土器 土師器 須恵器 陶器 磁器 石鏃 鉄製品	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第32集

原の辻遺跡

2006. 2. 28

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂